



雑木林

いろいろな個性が集まっていた。



山梨
 おうみ未来館4階生

尾子木
 義洞重瀬
 幸初穂田
 英馬幸洲

日本酒
 日々

おうみ未来塾4期生生活動記録誌

雑木林



2002. 6. 9 ~ 2004. 3. 7

目次
contents

①	おうみ未来塾4期生の活躍を楽しみにしています……………	1
	塾長 日高敏隆 運営委員 織田直文、岡崎昌之、岸田眞代、 辻川作男、藤井絢子	
②	おうみ未来塾4期生勢揃い……………	5
③	2年間の経過 入塾から卒塾まで……………	6
④	グループ研究活動の成果	
	(1) 生活文化企画集団「よったり」……………	14
	(2) ひと録……………	40
	(3) 地域家族研究チーム……………	60
	(4) e-食……………	80
⑤	おうみ未来塾4期生は、………………	100



おうみ未来塾塾長
日高敏隆
(総合地球環境学研究所長)

4期生の皆さん、卒業おめでとう！

2年間いろいろ大変だったと思いますが、それぞれに大切なことを感じとったことでしょう。

今年の皆さんは記念に植樹をするそうで、とてもうれしく思います。卒業式の日にお話したように、ほくはぜひエノキの木を植えてほしいと思いました。

それは、あの美しいオオムラサキというチョウの幼虫がエノキの葉を食べて育つからです。

ところが滋賀県立大学のある彦根にはエノキがたくさん生えているのに、オオムラサキはいません。なぜかという、オオムラサキの親はクヌギやコナラの木の樹液を食物にしているからです。

残念ながら彦根には樹液を出しているクヌギやコナラの木がほとんどないようです。これではオオムラサキは住みつけません。

では、クヌギやコナラを植えればいいのかというと、話はそう簡単ではないのです。クヌギや

コナラの木の樹液がでるためには、これらの木にボクトウガという大きなガ（蛾）の幼虫がついて、幹の内部をかじってくれる必要があるらしいのです。幹をかじられたクヌギやコナラはその犯人の幼虫を退治しようとして、樹液をだします。するとその樹液にカブトムシやオオムラサキがやってくるというわけです。

だから、オオムラサキが住みつくためには、エノキだけでなく、クヌギもコナラも必要で、さらにボクトウガという一見関係のなさそうな蛾までいなくてはならないのです。

世の中はみんなこんなふうになっています。みなさんが地域で活動するときは、このことをぜひ忘れないでください。「どうなっているか」ばかりでなく、「なぜそうなのか」も考えてください。みなさんの活躍をたのしみにしています。



おうみ未来塾運営委員長

織田直文

(京都橘女子大学教授)

4期生の皆さん、卒塾おめでとう。

運営委員長の織田直文です。

おうみ未来塾の運営委員会では、基本的に地域プロデューサーというのは、一体何なのか。本当に何を求め、そしてどこに向かって何をしようとしているのか、真剣にいつも議論しています。決してしっかりと完成されたカリキュラムなり事業を、皆さんに投げかけていた訳ではありませんでした。この未来塾自体は、塾生と協働して行う地域づくりの実験プロデュース事業と言えます。

私は、4期生と共に2年間、何を悶々とし、あるいは学んできたのかというと、地域プロデューサーという定義を、2つに分けて整理してきました。

一つは、見えやすい取り組み。これを生かしてコミュニティービジネスを立ち上げたら滋賀は元気な経済になるよね、あるいはこのイベントをやれば、この思いが表現できるよね、変わるよねというタイプを「事業プロデュース」と整理しました。

次に、そういうことを通じて何をしたいのかということ、もっと根本の一番変えたいテーマ、本当に根っこが深い問題を解決しようという、これを「社会改革プロデュース」と定義しました。世の中を良い意味でもっといい風にしたいな。これではいかんよという、この社会改革プロデュースのテーマは重たいですし、深いですし、半年、1年、2年や3年という問題ではなからうと思います。

すでに県下では、一個人として生涯かけて自分の住むところで地域興しを考えたり、まちづくりをするときのベースを作っている、生涯をかけてのプロデュースに取り組んでいる人たちがいます。

4期生は、まだ2年間ですが社会改革のプロデュースたらんと志を持って取り組んだということの評価しています。そして、少なくともそこには、問題意識があるかないかということをお問われれば、それぞれ熱いものがあったと思っています。

私は今、私たち地域プロデューサーにとって一番大事なことは、強い、弱いももちろんあるのですが、まず、問題意識そのものを持つか持たないのか、あるのかないのかということです。意識さえあればそれは徐々に強められますが、余りにもなさすぎると感じる昨今の世の中ですから、そこを十分考えて取り組んでいってください。

塾での2年間の活動は、まだまだ力不足だったかもしれない。事業プロセスの方、あるいはプレゼンテーション、これはまだまだだったかもしれない。しかし、それがまずなかったから、それが失敗したから、根幹の社会改革をしようというプロデュースがへたることはないと思います。むしろ、失敗を糧に伸びていく可能性を信じたいと思います。

4期生のみなさんが、地域で活躍されることを楽しみにしています。



おうみ未来塾運営委員
岡崎 昌之
(法政大学教授)



おうみ未来塾運営委員
岸田 眞代
(NPO法人パートナーシップ・サポートセンター代表理事・事務局長)

“小さい自治”が話題になっています。合併特例区や地域自治区だけでなく、より地域社会に密着した、まちづくり協議会や地域振興会など、住民組織の再編と再生です。市町村合併で基礎自治体の区域が拡大するにつれ、住民への行政サービスの低下が予想されるからです。ただそれだけでなく、住民の身近なところで地域の問題を解決する必要性が高まっていることも指摘しなければなりません。福祉、教育、環境、産業振興などの諸問題です。これらの問題は、われわれの地域社会に直結した課題です。全国一律に解決を図ろうとするより、個別の地域的視点に立脚して、はじめて効果的な解決の方策が見い出せるのです。しかもそれほど時間的余裕は無く、早急な対応が期待されている課題群です。

おうみ未来塾を終了された皆さんに期待されていることは、地域プロデューサーとして、地域の現場で“小さい自治”を担い、こうした地域の課題解決と地域再生に取り組んでいただきたいと期待しています。

4期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。2年間の「おうみ未来塾生活」はいかがでしたか？これ以上ないくらいに十分力を注いだ人はその分返ってくるものは大きかった（これからもきっと大きい）でしょうし、心ならずも十分力を注げなかった人はその度合いに応じてそれなりの成果になったのではないかと思います。

いつも思うのは、その場その場で精一杯努力したものは、いつか必ず自分の身になって返ってくるということです。それが何であるかはさておいて…。だからこそ、自分の持ち場を大切に、たとえ精根尽きても「やってよかった」と言えるものをひとつはもつことの意味があるように思います。

それが自分の地域であればなおのこと。「地域プロデューサー」をめざすそれぞれの使命ややりがい、そのうちきっとみえてくるのではないのでしょうか。（もう見えたかな？）もちろん「地域」は、広くっても狭くっても、人によってさまざま。違っていいのです。

みなさんのこれからの大いに期待しています。ひとりの仲間として。



おうみ未来塾運営委員
辻川 作 男
(おうみ未来塾1期生)

思想や哲学が時代背景を抜きにあり得ないと同様に、未来塾の各期生ごとにも期別ごとに異なる個性のようなものが感じられる。4期生の個性を一口で言うなら「それぞれ個性をもった不揃いの林檎」であろうか。

ある雑誌に『沈黙の春』の著者レイチェル・カーソンに先駆けて農薬害の告発を行うとともに、無農薬栽培に挑戦する日本の林檎栽培者の話が掲載してあった。「科学合成の農薬をまったく使わず自然の総合力を働かせて林檎を栽培すると、枝が異なるだけでも顔の違った美味しい林檎が出来るんだ」との言葉に惹き付けられた。

これまで滋賀の各地域に根ざす特性のもとで芽を出し、「未来塾」という幹で、多くの人の支援という良質の堆肥により成長した4期生は、光り輝く林檎である。形は不揃いかもしれないが、それぞれの顔をもつ個性豊かな美しい林檎なのだ。

今後も精進され滋賀のあちこちに大きな実を成らしてほしい。ご健闘を祈ります。



おうみ未来塾運営委員
藤井 絢 子
(滋賀県環境生活協同組合理事長)

おうみ未来塾4期生の皆さん、2年間の塾生同士の交流や議論、フィールドワークを通じた新しい出会いなど、得られたことは多かったですでしょうか。

地域プロデューサの役割を「『課題』の発見と、それを『何とかしたいという思い』によって『当事者』になる」と、研究活動の中で見い出してこられました。チームで何かをするというのは、本当に大変なことだと経験を通して理解されたと思います。

皆さんの現場はこれからです。現場主義に徹して地域の課題を捉え、そこに関わった一人ひとりが当事者になるようなプロデュースに心配りしてください。4期生のそれぞれが地域で取り組まれた成果を、2年後、3年後、できれば10年後に見させていただけることを楽しみにしています。

青山 裕行

アオヤマ ヒロユキ

伊庭 盟代

イバ チカヨ

尾本 良子

オモト リョウコ

小林 由季

コバヤシ ユキ

進 紀年

シン ノリトシ

竹腰 裕紀

タケコシ ユウキ

成田 政隆

ナリタ マサタカ

福村 幸子

フクムラ サチコ

水谷 光明

ミスタニ ミツアキ

石川 悠子

イシカワ ユウコ

大歳 はるか

オオトシ ハルカ

岸本 広樹

キシモト ヒロキ

小山 久子

コヤマ ヒサコ

提中 富和

ダイナカ トミカズ

谷 優

タニ マサル

初田 幸穂

ハツダ サチホ

松田 達也

マツダ タツヤ

糸井 豊美

イトイ トヨミ

大林 恭子

オオバヤシ キョウコ

後藤 英夫

ゴトウ ヒデオ

志茂 文明

シモ フミアキ

高橋 博

タカハシ ヒロシ

洞ヶ瀬 義重

ドウガセ ヨシシゲ

原田 秀雄

ハラダ ヒデオ

馬淵 英幸

マブチ ヒデユキ

おうみ未来塾4期生 2年間の活動概要

2002年

●6月 9日(日) 13:30~15:00

◇開講式 (ピアザ淡海203会議室/大津市)

◇講義:「学びとは何か?」 日高 敏隆氏 (おうみ未来塾塾長)

◇ワークショップ 15:10~17:40

ワークショップ:「コミュニケーション」

岸田 眞代氏 (パートナーシップ・サポートセンター事務局長)



開校式を終え、やや緊張気味の4期の塾生一同。岸田先生の指導により各自の想いをシンプルな絵にして自己紹介しあった。少し座の空気が和んだ後、各テーブル毎、簡単な図形ながらいくつかのポイントを次の人にうまく伝達するゲームをおこなった。結果は最初と最後の図形のくいちがいになら大爆笑!伝達することの困難さを学びながら、塾生間のみならず人とお互いを理解することの困難さを知る指導と助言に一同…「ホッ!」

●7月 6日(日) 10:30~17:00 (かわらミュージアム/近江八幡市)

◇講義:「まちづくり」 吉田 正樹氏 (おうみ未来塾1期生)

◇講義:「住民と行政の共同による新しいまちづくり」

岡崎 昌之氏 (法政大学現代福祉学部教授)

まちとは/なぜ、いままちづくりか/新しいまちづくりとは?など、世界と日本におけるまちづくりの歴史的経過やこれからの「まちづくりのあり方」などの講座に目を開かせてもらった。一例として、銀座に能登の木材、家具、建具、食器、産物などを使い地域の良さを紹介する「飲み屋」の話。洗濯物を家の外に(日本)、屋内に(西欧)干すことにより変わる街の風景の変化は…などと、楽しげに語られる先生が印象的でした。

近江八幡の八幡堀で昼食に舌つづみ。終われば「日牟禮の舎」にての喫茶談義に思い出を残して…。

●8月17日(日) 13:30～/18日(日) ～12:00



(アイリッシュパーク、びれっじ1号館、
ホテル西びわこ/高島町)

◇フィールドワーク・講義/合宿:

織田 直文氏

(京都橘女子大学文化政策学部教授)

高島町で噂になるのは「ガリバー青少年旅行村」変わりゆく社会の中でこの町に漂う閉塞間に風穴をあけるショッキングコンセプトが「ガリバー」に。

織田先生が一枚も二枚も囓んで。また旧家屋の売却を惜しむ町内の方が自費も投入、募金も集め、汗をかき、生まれたのが「びれっじ1号館」「2号館」。町長は、PRはお金を使わずやるのが智恵と…。アイリッシュパークの町職の人に学びを！夜、感想を交え「高島町」への提言をテーブルごとに作成。後日、織田先生が「高島町長」に提言としてまとめ手渡すとのこと。飲むほどに酔うほどに「なぜ未来塾へ」各自の想いが行き交う！初めて語り合った印象が残る。

●9月15日(日) 10:30～17:00

(愛東町大字中戸公民館)

◇フィールドワーク:

藤井 絢子氏(環境生協理事長)

山田 実氏、奥村 清和氏



愛東町の美しい自然と環境を残し伝える「孫子あんしん条例」を制定するため各村の色々な人々に「宝さがし」を！未来塾4期生として地域を丹念に「観察し、発見する」新鮮に見る…歩いて、撮影して…。貴重な江戸期の？水路の地図も見聞し、汗をかき、学ぶこと、発見することに新鮮な驚きの声。たくさんの宿題をもらって帰路に着く。少しでもお役に立てばうれしいな！

●10月 6日(日) 13:30~17:00 (アート・イン長浜/長浜、神戸会館)



◇講義：「博物館都市構想のあゆみ」
辻川 作男氏
(長浜市民国際交流協会)

「アート・イン長浜」「楽市・楽座」「黒壁」など全国に知られた「博物館都市構想のあゆみ」の出発点は歴史の学びでもあり、また一燈園を興した「西田天香氏の哲学を学ぶ：志しを知る」長い間の学びから生まれた「まちづくり」運動であったことはすばらしい教訓、行政、住民、商店街の人々。長浜を想う人々の協同と行動、実践が力に！またまちづくりを高さで表現するハコモノ思想から平面にしてゆく構想は地域プロデュースのあり方の一つの素晴らしいモデルでは…？ファイルに綴じられた詳細な資料がそれを語ってくれる。

●10月16日(水) 19:00~21:00 (ピアザ淡海206会議室/大津市)

◇卒塾生の活動を聞く「セブン・ドロップス」
セブン・ドロップスのメンバー

●10月27日(日) (草津市立市民交流プラザ/草津市)

13:30~ 3期生中間発表会

17:00~ 4期塾生会「3期生の発表を聞いて(講義のすすめ方等)」

3期生4グループの中間発表は、なかば圧倒されながら、その発表を聞く。各卒塾生の厳しい質疑の中でテーマ出しや決定、グループ分けの流動的な部分に、4期生ひとり一人の「未来塾」によせる想いを互いに知ることの重要性を感じながら…そのために議論に花咲かせる時間の確保を、と皆で確認。

●11月16日(土) 9:30~16:00 (八日市市、多賀町、彦根市)

◇講義：「地域ケアからまちづくり」 北川 憲司氏(滋賀地方自治研究センター)

◇施設訪問：しみんふくしの家八日市、多賀清流の里、べるふらっと

●11月23日(土) 13:00~17:00 (まちづくりセンター/草津市)

◇塾生ワーク：意見交換会（4期生の活動から）塾生5名から話題提供



10月27日の話し合いに基づいて、塾生5名（水谷・糸井・志茂・石川・福村）から話題提供を行い、話し合い。

塾生間の理解が深まると共に、グループ分け・テーマ分けの困難さを予感させられた…近辺喫茶店で語りあいもまだ…楽しい！

●12月 1日(日) 9:30~16:00 (聖泉短期大学/彦根市)

◇講義・実習：「食と地域文化」

堀越 昌子氏（食と文化研究会）

松井 賢一氏（湖北地域農業改良普及センター）

●12月15日(日) 13:30~17:00 (ピアザ淡海/大津市)

◇塾生ワーク：意見交換会（未来塾で学ぶこと）

未来塾で学ぶこと、意見交換、近々にせまったグループ分けを意識してあらためて「未来塾で何を学ぶか！」の議論に問題意識と真剣さが加わる。

▶2003年

●1月11日(土) 9:30~/12日(日) 10:00

交流会、合宿：（大阪市立びわこ青少年の家/高島町）

◇講義：「企画書の作り方」 洞ヶ瀬義重（4期生）

木村光一（淡海ネットワークセンター）

●1月25日(土) 10:30~1:00 (ピアザ淡海207会議室)

◇講義：「リーダーシップ論」（3・4期生合同）

岸田 眞代氏（NPO法人パートナーシップ・サポートセンター代表理事）

3期生、4期生がテーブルを共にして学びあった最初にして最後の学び、又、それぞれの個性が見えました。先生の長年の実践から得られたアンケートによる独自のリーダーシップ像の分析に“成るほど”“成るほど”と！…一部では納得できなさそうな顔もあり。

●2月11日(火・祝) 13:00～17:00 (ピアザ淡海204会議室)

◇塾生ワーク：研究テーマだしの為の論議

●2月23日(日) 13:00～17:00 (米原町中央公民館)

◇塾生ワーク：研究テーマだしの為の論議

●3月 8日(土) 10:00～13:00 (市町村職員研修センター／大津市)

◇塾生ワーク：研究テーマ、グループ討議(午前)

3期生 活動成果発表会、卒塾式(午後)

3期生各グループ学びと発表に各々の特色が出ていて中々おもしろい!

3期生の諸先輩たちより感動と共感をもらって— さあ、これからが大変。いよいよ我がこと。
次の発表は、私たち。何かしら緊張感がただよう。

●3月30日(日) 10:00～17:00

(市町村職員研修センター／大津市)

◇塾生ワーク：研究テーマ、グループ分け



●4月中旬

研究テーマ討議(各グループ)

グループ研究計画、予算など立案

●4月29日(火) 10:00～17:00 (ピアザ淡海204会議室)

◇塾生内テーマ発表：テーマ設定の発表と議論

●6月 7日(土) 13:00～17:00 (ピアザ淡海207会議室)

5期生入塾式

新しい塾生を迎え、5期生の有意義な活動を期待して、4期生から活動経過をビジュアルに映し出して説明をしました。1年前を思い出す4期生達でした。

●6月29日(日) 13:00~16:30 (まちづくりセンター/草津市)

◇講義:「元気な町の元気の秘密」 大歳昌彦氏(株)オンステージ代表



●8月30日(土)~31日(日) (岐阜県郡上郡八幡町)

◇県外研修:郡上八幡産業振興公社ほか
水を活かしたまちづくり調査



●10月26日(日) 13:30~

◇4期生グループ研究・中間発表会



▶ 2004年

● 1月17日(土) 13:30～／18日(日) 10:00

◇ フィールドワーク・合宿 (萩の露・びわ湖青少年の家／高島町)

未来塾4期生最後の合宿。誰から発案することなく実施。

17日13時 高島「萩の露」集合 福井弥平商店専務の案内で酒蔵案内。杜氏さんの好意で「ム口」を見せてもらう。



萩の露 ム口

その後、仕込みタンクを見学。

狭い、急な階段(はしご?)を上りホーロー製のタンクを見る。熟成を待つ酒の表情に甘酒?かす汁?を連想。ぶくぶくと発酵が進み酒になるときを待っている。



一通り見学を終え、座敷に案内され「利き酒」。山田錦、こしひかり、銀吹雪の新酒を味わう。米の違いが酒の味の違いになる。酒蔵での酒の味の違いを実感することができた。福井商店の歴史、地域での歴史など当主が語る歴史物語、地域史なかなか味わい深かった。

大阪市青少年の家

「萩の露」見学を終え、合宿地青少年の家に。

「e-食」主催の利き酒会開催。七本槍、萩の露、御代栄、3種類を利く。

その後、木村さんから4期生の未来塾での歩みの再確認。こうしてまとめられて報告を聞くと結構たくさんの事を行ってきたことを実感。と合宿のまじめな講義を終了。

その後は、青少年の家特製「しし鍋」、尾本さん特製「湖国料理」を賞味。ワイワイがやがや夜遅くまで研究は進む合宿でした。

*写真はその筋のお達しにより掲載できません。悪しからず。

●3月 7日(日) 13:00~18:00 (ピアザ淡海207会議室)
4期生グループ研究報告会・卒塾式 (一般公開)



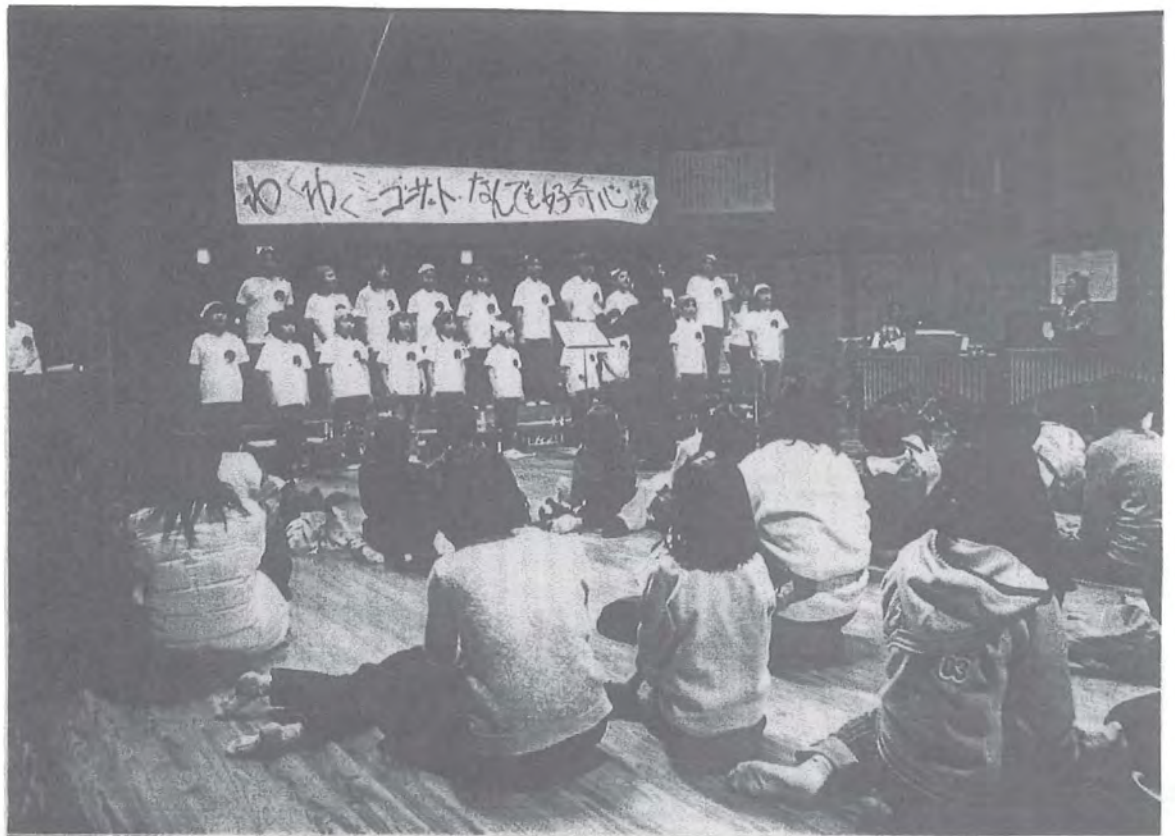
グループ研究

生活文化企画集団よつたし

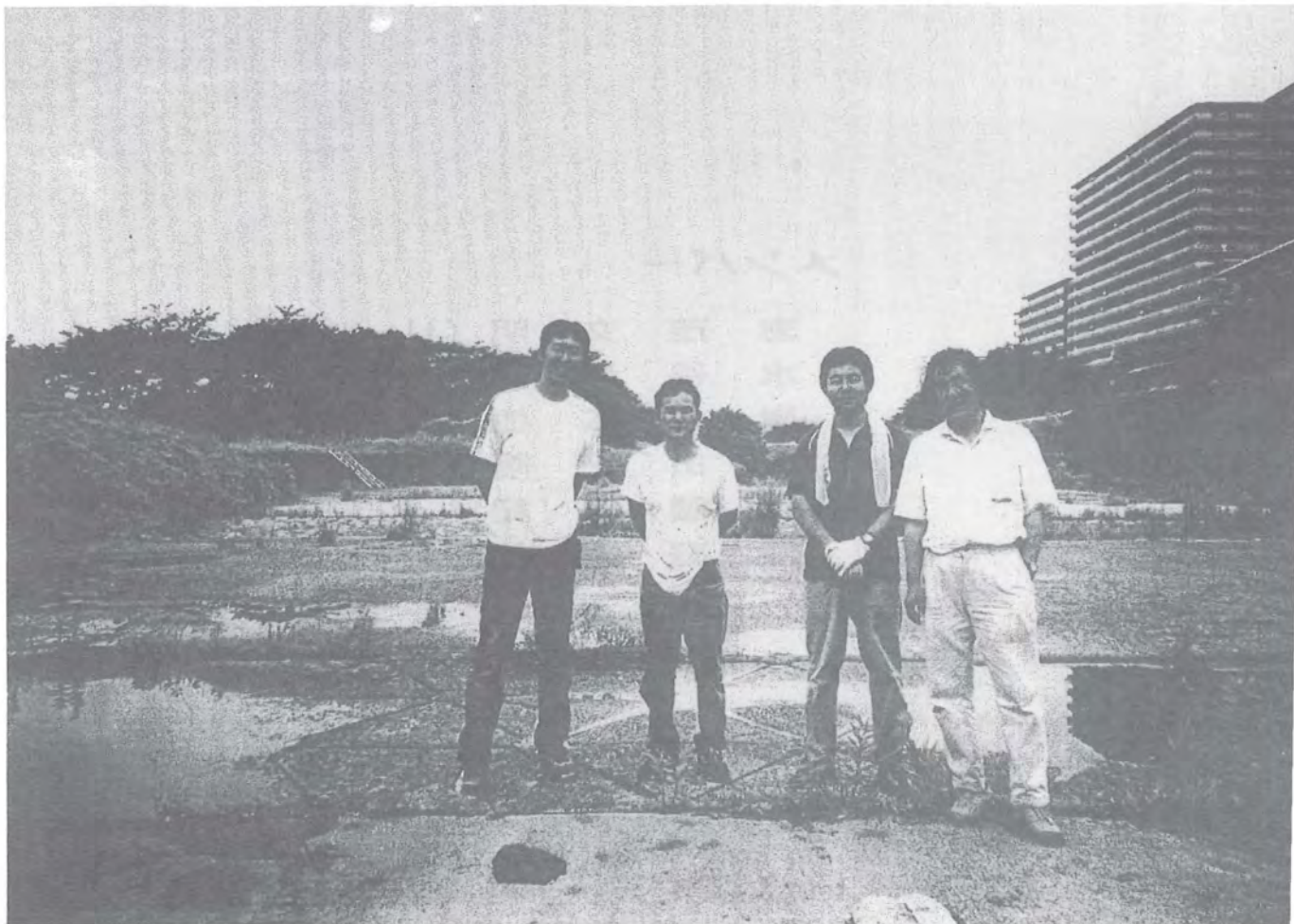
メンバー

志	茂	文	明	(リーダー)
水	谷	光	明	
岸	本	広	樹	(事務局)
成	田	正	隆	
竹	腰	裕	紀	
伊	庭	盟	代	

おうみ未来塾 4 期生



胸にしみしました“世界にひとつの花”



生活文化企画集団よったり

◎ よったりとは

「よったり」とは、いろんなひとが歩みよったり・意見を出しよったり・みんなの気持ちをよ(ゆ)ったりさせたり、時にはみんなで楽しくよ(酔)ったりなど、いろいろなよったりが集まった名前となっています。

◎ 基本コンセプト

特定の人・特別な訓練を受けた人のモノとなっているアートをも、もう一度普通の人々の手の中に取り戻したいと考えている。

本来文化というものは、普通の人々の日々の暮らしの営みの中から生まれ、育まれてきたものであった。創造力は誰の中にも眠っており、少しのきっかけで誰もがアーティストになれていたのである。

しかし現在の社会の中では、さまざまな物が余るほど存在する反面、自分で何かを創造する機会は減少しているように思われる。

そこで、生活文化企画集団「よったり」では、いろいろな企画の提案を通して物を創造する機会を提供し、創造の楽しさ、充実感、達成感を味わってもらいたいと考えている。また、イベントという形を用いることにより、人々が集まって何かをすることによりうまれる横のつながりや仲間意識も育てていきたいと考えている。

「よったり」では、人々が自分の感性から創造したもの・創造することをアートとよび、アートを感じる豊かな心を100年後の人々に伝えて行きたいと考えている。

◎ 活動形態

○ 活動について

「よったり」の活動形態は企画を提案することを基本とする。自分たちが実施するのではなく、裏方としてイベントをサポートする。

○ メンバーについて

活動は多岐にわたり、時間・興味などの面からすべての活動にメンバー全員が参加することは難しくなると思われるので、基本的に参加は自由とする。ただし、「よったり」の活動とするためにはメンバーの同意が必要とする。

○ 参加について

正式な(?)メンバーになるためには他のメンバーの同意が必要であるが、各イベントにおける参加者については基本的に制限無しとする。

”よったり”活動経過報告

日時	場所	内容
3月30日	淡海ネットワークセンター	グループ分けについて
4月6日	山科	グループの活動及び名称について
4月15日	草津天気村事務所	「ごみ？アート展」について
4月29日	淡海ネットワークセンター 他	グループ再確認およびログハウスについて
5月10日	堅田	ログハウス及び今後の進め方について
5月14日	草津・ログハウス	ログハウスについて
6月16日	山東町	「ごみ？アート展」について
6月27日	近江八幡	「ごみ？アート展」について
7月3日	草津天気村事務所	「ごみ？アート展」について
7月12日	旧草津川	「ごみ？アート展」開催
9月28日	淡海ネットワークセンター	中間発表および今後の活動について
10月1日	石山	中間発表および今後の活動について
10月11日	草津市立まちづくりセンター	近江文化サロン
10月23日	淡海ネットワークセンター	中間発表および今後の活動について
10月26日	淡海ネットワークセンター	中間発表
11月5日	近江八幡	今後の活動について
11月14～15日	大阪市立びわ湖青少年の家(高島)	「よったりとは…」
11月22日	草津市立まちづくりセンター	近江文化サロン
11月26日	守山	「スノーアート」について
12月8日	大津	「湖国と文化」中井二三雄氏と懇談
12月12～13日	山東町	「スノーアート」について
12月20日	草津市立まちづくりセンター	近江文化サロン
1月7日	近江八幡	「スノーアート」について
2月4日	近江八幡	「スノーアート」について
2月7～8日	山東町	「山東スノーアートまつり」開催
2月23日	大津	「滋賀県県民文化課」門脇宏氏と懇談
3月3日	淡海ネットワークセンター	卒塾式について

スノーアーティスト認定証

あなたは、山東スノーアートまつりに参加され、
その才能を十分発揮されましたので「スノーア
ーティスト」として認定します

2004年2月8日

山東スノーアートまつり実行委員会

おうみ未来塾・生活文化企画集団よったり

活動を振り返って

◎「ごみアート展」

この企画は、NPO 子どもネットワークセンターの天気村の山田貴子さんとの出会いから始まり、実施したイベントでした。あいにくの雨降りになってしまいましたが、子どもたちは元気にとび回っていました。最後にメンバーがしめくくった言葉「みんなー、来た時よりここがきれいになったネェー」で納得のいくイベント、ユニークな作品も多くめられました。

◎「文化サロン」

主旨、近江の生活文化を語ろうということで、それぞれ参加者の思いを自由に語り合うことをしました。これも、「よったり」の重要企画活動です。10月・11月・12月に実施し、語りを中心にして有意義な時間を過ごしました。

◎「山東スノーアートまつり」

冬ということで雪、造形、おまつりなどをアイデア出したあと、地元の人たちに協力を依頼したことから大幅にプランが広がり、歌あり、郷土料理ありの盛りだくさんの企画し合ってイベントを実施させたことは成果でした。

おうみ未来塾の一つのありかただとおもいました。

◎ 人と会う

- ・ 「湖国と文化」中井二三雄氏
- ・ 「滋賀県県民分化課」門脇宏氏

今後の予定

◎ 公共施設との関わり

- ・ びわこ博物館
- ・ びわ湖ホール
- ・ 県立美術館

◎ 懇談会

- ・ 環境芸術作家 土田
- ・ 造形作家 深田氏
- ・ 甲西町町
- ・ 新旭町長

ゴミ？アート展



捨てたら…ゴミ！
 生かせば…資源！
 遊べば…アート！！
 たべて・遊んで……ほんで アート

旧草津川堤防の涼しい木陰の下で、
 楽しい思い出をつくりませんか？

- と き 7月12日(土) AM10:00~PM2:00
 ところ 旧草津川堤防(JRの上)
 集 合 草津公民館(JR草津駅から商店街を歩いて5分。お車でお越しの場合、駐車場はありませんが、出きるだけ相乗りでお願いします)
 内 容 旧草津川の河川敷で、集めたゴミ(?)を使って参加者のアイデアで、環境学習をしながら楽しくアートを表現し、地域の人々や子どもたちと交流します。
 参加費 1人300円(昼食、保険代ほか)
 持ち物 水筒、タオル、帽子、着替え(汗かきの方)など

主催/生活文化企画集団“よったり” (おうみ未来塾4期生) 共催/NPO子どもネットワークセンター天気村 協力/成安造形大学・滋賀県エコライフ推進課・草津市・草津市教育委員会・草津市環境課

生活文化企画集団“よったり”が、NPO 子どもネットワークセンター天気村さんと共同でするはじめての企画です。4月から温めていた企画ですが、温めすぎて周知が遅れ、急な申し込みとなりましたが、ぜひ、ぜひ、未来塾のみなさんのたくさんのご参加をお待ちしています。申し込みは当日参加も受け付けますが、できれば事前にお申し込みください。完成作品の持ち込み展示も歓迎します。

〈お申し込みとお問い合わせ〉

生活文化企画集団“よったり” (おうみ未来塾4期生)

電話090-6068-1389(志茂) FAX0740-36-1477(岸本)

e-mail: kissy@360.fm (岸本)

生活文化企画集団よったり企画 ゴミ？アート展申し込み用紙

当日参加も
OKだよ！

住所	氏名	年齢	電話番号
連絡事項			



一人でもよったり 奮戦一 子供たちは真剣、後ろでホイしてるの誰だ!



=ごみ？アート展について=

「ごみってなあに？」をキーワードとして「ごみ」について考える機会を設けた。また、いらないものは見方を変えるとまだまだ使えるもの、アートな作品にもなりうる」ということを体感してもらうために、「ごみ？アート展」を企画しました。



イベントをふりかえって…（ふりかえりシートより）

- ・ 準備・企画時について
 - ・ 協力団体との話し合いの詰めが甘かった
 - ・ ごみとは、アートとはについてもっと議論をするべきであった
- ・ 当日について
 - ・ 想像以上に子どもたちの想像力は豊かだった
 - ・ 雨であったが中止しなくて良かった
 - ・ 全体での振り返りの時間が取れなかった
- ・ 今後のために
 - ・ スタッフや参加者に対するスケジュールの説明を徹底するべきであった
 - ・ もの作りの場合、形に残せるものの方がよかったのでは
 - ・ プラン検討にもっと時間をかけるべきであった
- ・ その他雑感
 - ・ 釘うちやノコギリなど危険かとも思ったが、子どもたちは想像以上に積極的だった
 - ・ みんなの力を合わせてやり遂げたと言う充実感

ごみで作った「花」をイメージした作品
(草津市・旧草津川河川敷)



廃材から「感動」

ごみアート

草津市子どもたちが十日、市内の旧草津川河川敷などで拾い集めたごみを素材にし、花や家などの造形作品を制作した。

草津の児童ら制作

活動法人「子育てネットワーク天気村」(山田貴子代表)と、おつみ未来塾のグループ「生活文化企画」が、生活から出るごみで、人を感動させるアート

が生み出せることを知ってもらおうと企画した。

地元の小学生や園児ら約六十人が参加。子どもらは、ごみの少量化や再資源化の大切さについてメンバーから説明を受けた後、旧草津川河川敷で空き缶や段ボール、花火の燃えかすなどを

自然。環境。心わくわく

第一回「近江文化サロン」発足のお知らせ

湖面を吹き渡る風もめっきり秋色を濃くして「秋思」の季を迎えました。
近江の国とは？ 近江人の生活とは… いとなみの文化とは？
語りだせば 秋の夜長も白々として— なんてならないように……
コーヒーや紅茶の香りと共に話し合う！ 語りも学びも「みんなが主役」「我々、吾々」
ガヤガヤと話せば結論は出さずとも新鮮な発見とヒトとの想いの出合いがあるはずです。
三ヶ月前から計画していてやっとやっと開催の運びとなりました。
急なことゆえ、興味がある方、来れる方のみでも…
第一回発足のお知らせです。

* 主旨・目的: 近江の「生活文化」を語ろう—

* 時・ところ: 10月11日(土)PM6:00~9:00

草津まちづくりセンター和室(草津駅西口陣)

* 呼びかけ : おうみ未来塾四期生 生活文化企画集団「よったり」

これからも 話したり: 飲んだり: 歩いたり: 湯につかったり
みんなで よったりよったり—— 気長に続けましょう!

山東スノーアートまつり

＝プログラム＝

日時：2004年2月7日（土）～8日（日）・1泊2日

場所：(財)グリーンパーク山東（坂田郡山東町池下80-1）

山東幼稚園・カモンホール

山東スノーアートまつり実行委員会
（おうみ未来塾4期生生活文化企画集団・よったり）

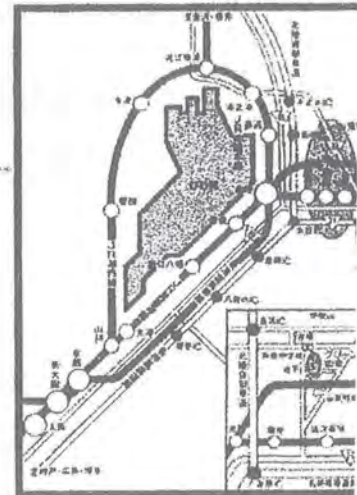
山東スノーアートまつり

生活文化企画集団よったり企画 PART2

湖北の地、雪国の山東で 楽しい思い出をつくりませんか？



- と き 2月7日(土)午後1:30~8日(日)午前中
 と ころ グリーンパーク山東(坂田郡山東町池下80-1)
 山東幼稚園カモンホールほか
 内 容 湖北・山東町の雪の中で、スノーアートや雪遊びなどの体験を通して、県内の親子が地
 域の人々との交流をします。ただし、雪が降らないときは別メニューを用意しています。
 スノーアート(雪で自由な造形)・雪遊び(雪合戦、雪だるま、かまくら etc)・田舎の
 家庭料理の味わい・わくわくナイト(ルッチ音楽隊ミニコンサート・星のお話し、観
 察会・キャンデーアート・信(のぶ)じいの「わらそうり体験教室」ほか
 対 象 県内の親と子(小学生)
 参 加 費 4,000円 親子ペア(大人1人2,500円、子ども1人1,500円)一泊2食付き
 ※子どものみ参加の場合は2,000円
 募集人数 40人(先着順)
 募集締切 1月31日(土)
 持 ち 物 宿泊の用意・筆記用具・雪遊びの着替えなど



<お申し込みとお問い合わせ>

生活文化企画集団「よったり」(おうみ未来塾4期生)

竹腰 電話090-6068-1389または

山東町役場環境保全課0749-55-8102・FAX55-8130

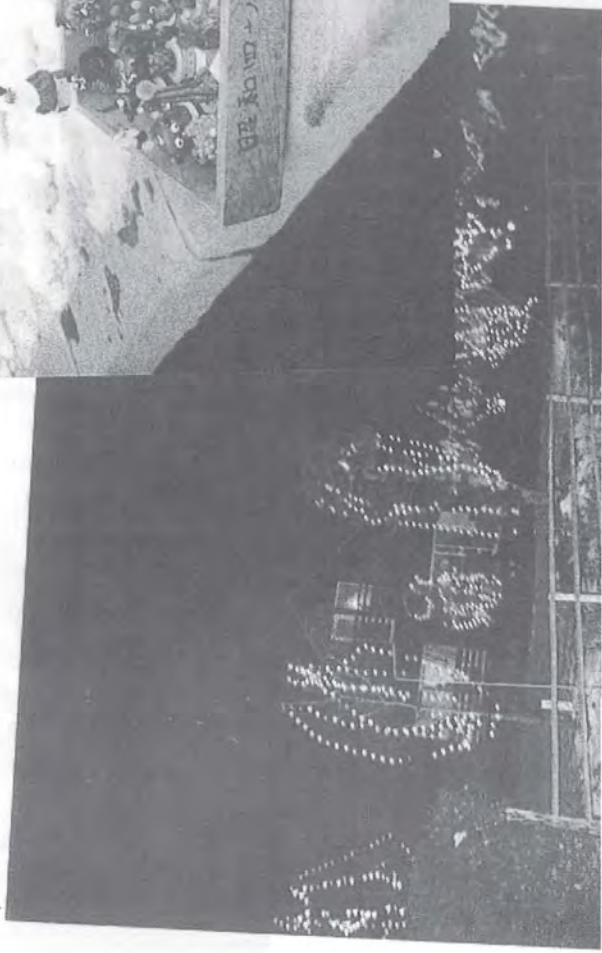
e-mail: takekosi@mx.biwa.ne.jp

主催/生活文化企画集団「よったり」(おうみ未来塾4期生)

生活文化企画集団よったり企画 PART2 山東スノーアートまつり申し込み用

住所	氏名	年齢	電話番号





「山東スノーアートまつり」

概要 雪深い湖北の地・山東町で、雪をテーマに親子でふれあうとともに参加者同士の交流、また地元の人との交流を深め、自然の中で雪を使って自由な造形を楽しむなど冬ならではのイベントです。湖北の冬の寒さを肌で感じ、伝統文化（わらそうりづくり）やネイチャーウォーキングの体験を通して自然環境への関心を深め、新たな発見をしていただこうと実施するものです。

主な内容

- ・スノーアート（雪で自由な造形） ※天候により内容に変更あり
雪遊び（雪合戦、かまくら、雪だるま etc） （協力：田中万祐さん）
ネイチャーウォーキング（水鳥観察会ほか） （協力：田中万祐さん）
- ・キャンディアート（アイスクャンディづくり）翌朝のお楽しみ
- ・夕食『田舎の家庭料理の味わい』（協力：丸本愛子さん、堀江瑠美さん）
- ・わくわくナイト
ミニコンサート（協力：ジュニア音楽隊ほたるっち&カモンカンパニー）
〈ジュニア音楽隊ほたるっちの合唱〉
〈パーカッションによる演奏会〉
なんでも好奇心！～おもしろ科学実験～ （協力：田中万祐さん）
- ・信（のぶ）じいのわらそうりづくり体験 （協力：中川信成さん、堀井種一さん）

日 程 [7日]

13:30 受付 山東幼稚園カモンホール（グリーンパーク山東の東側）
14:00 オリエンテーション
14:15 スノーアート（屋外）
雪遊び（雪合戦など）・ネイチャーウォーキング（水鳥観察会ほか）
16:30 自由時間
18:00 夕食（田舎の家庭料理の味わい）
19:00 わくわくナイト（山東幼稚園カモンホール）
（ジュニア音楽隊ほたるっち&カモンカンパニーによるミニコンサート・星のお話し、キャンドルサービス etc）
21:00 入浴・自由時間
キャンディーアート（翌朝コンテストがあるかも？）
22:00 就寝

[8日]

8:00 朝食&キャンディ食べましょう（コンテスト）
9:00 信（のぶ）じいの「わらそうりづくり体験」
12:00 終了式

＝スタッフ＝

志茂文明／水谷光明／岸本広樹／竹腰裕紀／木村光一

※ わからないことや困ったことなどがあつたら、スタッフに聞いてください。
スタッフは、首にスタッフと書いた名札をかけています。

山東スノーアートまつり子ども達へのアンケート集計結果

■参加してくれた子ども達に感想を聞いてみました。

参加者	54人
回答者	23人(+天気村)
回収率	%

問い①いつ来てくれたの？

A. 7日(土)だけ	6人
B. 7日～8日の2日間(宿泊)	17人
C. 8日(日)だけ	0人

問い②楽しかった感想を聞かせて

- ・知らない人と友達になれたことがうれしかった。
- ・雪遊びが楽しかった。(4)
- ・宿泊したことが楽しかった。(3)
- ・コテージ(宿泊場所)でみんなでプロレスをしたこと。(2)
- ・コテージでトランプやUNOなどが楽しくできた。
- ・わらぞうり作りが楽しかったし、勉強になった。(2)
- ・おもしろ科学実験(スライムづくり)が楽しかった。(2)
- ・食事(田舎料理)がおいしかった。(2)
- ・キャンディアートが楽しかった。(6)
- ・(コンサートで)歌えてよかった(ほたるっち音楽隊参加者)また呼んでください。(2)
- ・わくわくナイト(ミニコンサート)が楽しかった。
- ・また(スノーアートまつりに)行きたいと思います。

※天気村さんスタッフより

- ・泊まりに来ること事態初めてだったので何もかもが良い経験かったです。雪遊びに演奏とどれも楽しくて良かったです。
- ・雪遊びしている子どもたちは、とても笑顔で楽しそうでした。雪でつくるものはそれぞれ工夫されていてすごいと思いました。雪の冷たさを忘れるほど楽しかったです。
- ・郷土料理、保存食、みなさんの真心がこもっていてとてもおいしかったです。

問い③来年もこんなイベントがあったら来たいと思いますか？

A. ぜひ来たい	8人
B. どちらでも	15人
C. 来ない	0人

※よかったら、教えて！

☆どこから来てくれたの？

長浜市	4人	余呉町	5人	竜王町	1人
八日市市	1人	山東町	12人	大津市	
草津市					

☆年齢は？

7歳	3人	8歳	4人	9歳	4人
10歳	4人	11歳	4人	12歳	4人

雪合戦、かまくら 一緒に遊ぼう

山東町池下の野外活動施設も計画される。積雪の設グリーンパーク山東で、二月七、八日に山東スノーアートまつりが開かれる。同施設コテージに宿泊主催者の「生活文化企業集（一泊二食付き）する。参

来月7、8日 山東でまつり

同「よったり」が参加者を加料は親子ペア四千円。募っている。子ども二千円。申し込み雪を使った地域交流が目的は「よったり」の竹腰裕紀で、親子や小学生が対象。さん宮090（5004）雪合戦、かまくら、雪だるま8586。締め切りは三十

まなどで遊び、ミニコンサート一日。

『スノーアートまつり』参加を おつみ未来塾 山東で来月

財団法人・淡海文化振興財団のまちづくり講座「おつみ未来塾」は、山東町池下のグリーンパーク山東で二月七日から一日二日で開く「山東スノーアートまつり」の参加者を募集している。

同塾は一九九九年に開講。一期二年間で、グループ研究の一環として、まちの活性化を図るイベントを企画している。今回は、講座四期生六人が企画を担当。うち一人が山東町出身者であることから、舞台を同町に設定。参加者に地域性を味わってもらいながら創造性を養ってもらおうと、「雪を使った芸術体

験」をテーマに選んだ。まつりでは、雪で自由に造形する「スノーアート」や、雪合戦やかまくら作り、アイスキャンデー作りを楽しむ。また地元の家料理の提供やわらじ作り教室、合唱団のミニコンサートもある。当日は、町内の自然観察員や主婦、子どもたちも協力。先生役や出演者となり、まちづくりイベ

ントに二役買う。参加対象は県内在住の小学生とその保護者。費用は一泊二食付きで、親子ペアで四千円、子どものみ二千円。定員は計四十人。雪がない場合は、同パーク周辺の里山や三島池を歩いて自然を体感する。問い合わせは、竹腰裕紀さん。電話090（5004）8586（神原 崇仁）

スノーアート 祭り参加者募集

山東で来月7、8日

世代や地域を超えた交流とまちづくりを目指す「生活文化企画集団・よったり」（志茂文明代表）は二月七、八の両日、山東町池下のグリーンパーク山東で県内の小学生と親を対象にした「山東スノーアートまつり」を開く。

よったりは、淡海文化振興財団が地域リーダー育成を目的に設立した「おつみ未来塾」の第四期（二〇〇二―二〇〇三年度）のメンバーで構成。イベントの企画や運営をしている。スノーアートまつりでは、参加者に雪合戦や雪像作りを楽しんでもらう。雪が少ない時に備え、地域のお年寄りがわらじ作りを教える。自然観察会なども予定。

三十一日まで参加者を募集。参加費は同パークで一泊二食の費用を含め親子二人で四千円。申し込みと問い合わせは、よったりメンバーの竹腰裕紀さん（090・5004・8586）へ。

2004. 2. 25 あいあい滋賀 (朝日新聞)



雪だるまを作る子どもたち 山東町池下のグリーンパーク山東で

「山東スノーアートまつり」

自然環境の中で、親子でふれあうとともに、地元の人や参加者同士で交流を深めようとのほど、山東町池下のグリーンパーク山東で「山東スノーアートまつり」があった。

このイベントは、淡海ネットワークセンターが主催する地域プロデューサーを育てる『おうち未来塾』の第4期生(02、03年度)の中で結成された研究グループ「生活文化企画集団・よつたり」が企画、主催した。



2004. 3. 1 広報さんとう3月号

雪だるまやかまくら づくりに夢中

2/7・8 山東舞台にスノーアートまつり

「山東スノーアートまつり」がグリーンパーク山東で行われ、県内の親子が雪遊びやアイスキャンディづくりなどを楽しみました。

淡海文化振興財団が地域リーダー育成を目的に設立した「おうち未来塾」の第4期のメンバー6人が企画・運営。まつりは、雪をテーマに参加者おしりの交流を深めてもらおうと開かれ、大津市や草津市、八日市市などから66人の親子が参加しました。子どもたちは、芝生一面に雪が積もったイベント広場でアニメのキャラクターの雪だるまやかまくらづくりに夢中。冷たさを忘れておおはしゃぎしていました。翌朝は、大野木の中川信成さんと清滝の堀井種一さんを先生役にしてわらざり編みも行われ、参加者は自然に恵まれた山東を舞台に楽しい思い出をつくりました。



アニメのキャラクターの雪だるまをつくる子どもたち

雪とたわむれた親子ら66人

四期生6人が今回初めて企画。湖北地域の特徴である雪に触れながら創造性を養ってもらおうとが目的。県内の小学生や保護者ら六十六人が参加。スキーウェアなどを身に着けた子どもたちは、会場の芝生広場が真っ白も挑戦する。(榊原 崇仁)

2004. 2. 8 京都新聞



雪だるまをつくる子どもたち (山東町・グリーンパーク山東)

山東町池下のグリーンパーク山東で七日、「山東スノーアートまつり」が開かれ、親子づれら約七十人が雪だるまや雪合戦を楽しんだ。地域交流を目的に、住民グループ「生活文化企画」が主催した。八日は、わらざり作りを体験する。

“よったり”の一員として…

入塾して講義を中心とした1年が過ぎ、いよいよ2年目のグループ研究でテーマを絞り込んでどこのグループのどういうテーマで活動しようかというとき、悩んだ末、結局「文化」という幅広いテーマを選んで自分である。また、メンバーも個性的な人物が集まっていたような気がする。山科の桜が満開の疎水沿いを歩きながら、水谷さんが「集まったのはよったり（4人）か…」とおっしゃったので、ふと「グループの名前は“よったり”にしましょう…寄ったり、選ったり、拠ったり、時には酔ったり…もいいんじゃない」と、よったりが誕生した。

現在社会の中では、様々な物が余るほど存在する反面、自分で何かを創造する機会は減少しているように思われる。そこで、生活文化企画集団「よったり」では、いろいろな企画の提案を通して、物を創造する機会を提供し、創造の楽しさ、充実感、達成感を味わってもらいたいと考えた。また、イベントという形を用いることにより、人々が集まって何かをすることにより生まれる横のつながりや仲間意識も育んでいきたいと考え、活動を開始した。住んでいる場所も遠方同士で、それぞれまったく違う職を持つメンバーが、よくぞ何度もミーティングを重ねながら、草津市での「ごみアート展」、山東町での「スノーアートまつり」と年間2回ものイベントをこなしたものだ、と、今更ながら感心している。

ことのほか私としては、地元山東の地で開催した「スノーアートまつり」について感じたことを述べたいと思う。

どこのまちでもそうであるように、地域の人々の中には地元で培ったいろいろな知識や技を持つ人がいて、それを地域の為に生かしたい、仲間をつくって楽しく、しかも何か地域のためになることができればと思っている人がいると思う。例えば、特産品づくりをしたい、このまちをもっと住み良くしたい…そんな思いをもった人達が街中のあちらこちらに埋もれているのではないだろうか。

そんな思いの人々を巻きこんで、その思いを形にできるお手伝いができないか、あくまでも私たち“よったり”は主体ではなく、主人公は地域の人達だ。私自身も自分の住んでいるまち山東が大好きである。今回このイベントに関わって下さった人々も私以上にこのまちを愛しているからこそ思いが一つになって何とか一つの成功(?)を納めることができたのだろうか。思いが寄り集まって形になれば、自信がつき、もっと勉強したいと意欲が湧く。そんなプロセスを住民自身が経験していくことで地域力が高まり、惹いては自治力の高まりに繋がっていくのではないかと、ということを実感できたような気がする。

おうみ未来塾4期生 生活文化企画集団 “よったり”
山東町・竹腰裕紀

よったりの原稿

1. 文化グループに参加した個人の思い、いきさつ

一年目の終わりに身動きがとれず、グルーピングが終了してから、どのグループに入るかの選択の中、文化という言葉にひかれました。滋賀県の文化。雄大なる歴史と、びわ湖とともに生きてきた独特な文化。無性に気になった。そして、四人のよったりの五人目に。よったりになるのかどうかなどなど、もめる原因に。でもやっぱりよったりに。

2. 各イベント他、活動を通じて(学んだ事、課題・ぶつかった事、感動した事・共感した事)

旧草津川河川敷での、雨の中のイベント。人集めの難しさを学びました。また一回目のイベントだっただけに、やってみないとわからない状況。しかしながら、子どもたちの発想のすごさ、子ども達の目の輝き、本当に感動しました。子どもたちの発想は、地域によって変わってくるのでしょうか？これまでに生まれ育ったバックグラウンドが違っていると、かわってくるのでしょうか？見てみたいですね。違いがでると、生まれ育った生活環境で、文化が変わると。特に子ども達は情報の供給は地域が主体だけに、よく見出せるでしょうね。今後の課題としていきたいです。

文字数を間違えてボツネタ…すみません。

◆環境…これまでに湖沼会議、水フォーラム、草津ジュニアボード、おおつ環境フォーラム、エコリーグ、大津こども環境探偵団とボランティアに参加してきました。これはこのまま続けていきたいです。そして、大学院で研究した廃棄物。もっと現場を見て、制度的枠組みに関して、何が必要なのか、どのような法的処置が必要なのかを搜索していきたいと思います。

◆イラク…環境とともにもうひとつのライフワークが見つかりました。国際支援です。もともと大学時代に、環境よりも興味があった分野。国際協力。しかも、誕生日が終戦記念日、政治を志した理由が湾岸戦争、大学での開発途上国への訪問、…。さまざまな所以があり、2004年にイラク調査に呼びかけられ、即答。生きて帰ってこれる保証のない中で、極限の状況で、見えたもの。日本で報道されているものは、まちがいはないものの誤解を与えてしまうような情報の提示。全ての情報を公開しなければ、全体像が見えてこない。現場を見ないと見えてこない。ほんの握りの情報だけで、議論されている国会、世論。人の命がかかっている、そして、われわれの税金が使われている。そんな中だからこそ、行動しなければならない。命をかけて、おこなわなければならないものがあると、再認識できるいい機会となりました。

成 田 正 隆

みらいじゅく『よったり』の活動を通じて

アート文化活動の楽しさ、可能性をさらに再発見いたしました。日々の暮らしこそ文化の基いであるという根本的なことから生活文化企画集団としてスタートしました。活動も塾生としては、無事卒業、今後は滋賀全体を活動にした『よったり』活動のほか、各メンバー地元での『よったり』活動も考え、それぞれがんばっていきたいと思います。出会えた喜び、この財産、人脈をさらに広げて、さらに大きな『よったり』を目指したいと思います。まずは、お世話になりました皆さま本当にありがとうございました。

……みらい塾ってお互いをプロデュースすることかな？

みらいじゅく『よったり』企画

文化サロン

文化サロンでは、グループ活動にこだわることなく気軽に誰でも参加できる「サロン」として参加者が自由に語り合い、交流できたことがとてもよかったと思います。卒業までのテーマ、グループ、成果という流れでは決して出て来なかった人のつながりでした。

今後は、さらに未来塾人脈から自由に広がっていく企画だと思います。また、お会いし楽しいおしゃべりしましょう。ぜひ、ご参加ください。

湖国と文化（中井編集長）

淡海文化について、また文化そのものについてお話をお聞きしました。その中で、印象的なお言葉…

「文化って『風』みたいなものだね。自然な空気、育まれていく地、日々の暮らしの中から…」

『風』共感しました。

県民文化政策課（門脇氏）

文化全般についてお話をお聞きしました。

「県としてあらゆる施策を行うとき（教育、福祉、……）それが文化の創造にどれだけつながることなのかを一番大切に考え、それを基に実施されてきた経過が今もあるとのこと。まったく、アート文化市民活動も同じ視点でした。長時間お話していただきましたが、今日の行政の方々の誠実な対応を実感しました。

ゴミアート展を実施して

ゴミアート展実施で学んだこと、知り得たことは多々ありましたが、共同企画した「npo子どもネットワークセンター天気村」の方々のすばらしさでした。当日は、雨模様、中止を考えましたが、「天気村」山田村長さんの「やりましょう」の一言。イベント終了後、子ども達が雨を通過（けっこう降りました）したとおっしゃって喜んでいただくことに感激しました。雨の中、元気に跳びまわる子ども達、ユニークな造形の数々、危ないから、事故……ではなく、しっかりしたサポートシステムづくりがしてあれば大丈夫なこと、「ここは、今日とっても重要なことがらだと思いました。…私らも子どもの頃そうだったっけ。

あぶないこと、危険なところけっこう喜んで行ってました。ケガもしたけど…

（大人の問題多し）

・ その時の記録（メンバー水谷氏）写真展ができなかったことが少し残念でした。また、い

ずれやりたいと思います。

山東スノーアートまつり

地元の方々の熱意、ご努力により実現いたしました。なにより（よったり）メンバー今イベントの総合プロデューサーの竹腰さんの地元の人脈の広さ、地元に対する熱い思いが今回のスノーアートまつりを成功させたと思っています。また、かかわらせていただいた方々を通し地域住民としてのあるべきすばらしい姿を見せていただきました。

自らの場所に帰った時、そうした人々との出会いこそ大切なことであり、自分自身のあり方まで知らされました。

反省点はいっぱいありすぎましたが、（人数オーバーで参加者、ご協力者にもご迷惑をかけたこと盛りだくさんのイベント内容にしたため一つ一つが弱いものになってしまったこと等々…ありました。

ただ、地域をプロデュースするということににつきましては、その一端は達成できたのではないかと思います。

メンバー竹腰さんに感謝。

おまかせばかりで ごめんなさい★

志 茂 文 明

◎ 文化グループに参加した思い

僕は、自分自身がアート・文化などと言う言葉とは無縁の存在だと思って生きてきました。と言え大げさになるかもしれませんが、自分にはアートのセンスと言うものは無いと思っていました。と言うか、今も思っています。しかし、グループ分けの際に志茂さんの「アート・文化とは、特別な人だけのものではなく、それぞれの心の中にある創造性を発揮する事がアートにつながる」という話を聞き、納得してしまいました。仕事とのかかわりもあり、子供達と楽しく何かできるきっかけがあるグループがいいなと思っていたところだったので、文化グループに参加しました。

◎ 活動を通じて

「よったり」の活動を通して、「人と人とを結びつける」ということを学びました。何か新しいことをしようと思うときには、ものすごく大きな壁が前に立っているような気がします。しかし、メンバーはもちろんのこと、色々な人と話している間に、様々なアイデアや解決策が見えてきます。

「人と人」の意見を調整するのも難しいのですが、「人と人」が集まることによって一人では想像できないようなことができることが、とても新鮮で楽しかったです。地域には、「何かしたい」と言う思いを持った人が沢山いることが分かりました。これからも、いろんなところで、いろんな人とつながりながら楽しんでいきたいと思えます。

「よったり」は生活文化＝生きること、そのものを学ぶことを根っ子としてその中でとりわけ人が持つ表現する力（アート）を切り口（コンセプト）として活動してきた。主な活動内容は

- ① 2003年「ゴミ？アート展」草津天井川河川敷にて
- ② 2004年「山東町スノーアートまつり」<1泊2日>
- ③ 2003～2004年 「文化サロン」草津まちづくりセンターロビー

○ ゴミ？アート展

毎日の生活から生み出されるゴミ！捨てられてしまえばゴミに…捨てられるまでに何かの役割を！ゴミ？ってなあに！という切り口から「それをアートにできないか！」と言うリーダーの志茂君の行動力に引っ張られ、それが実現、河川のゴミを回収しゴミと環境問題を考えながら、「子供たちの表現する力をアートに！」雨中決行された「ゴミ？アート展」は参加した子供たちの遊び（表現力創意）が→そこにあっただのは捨てられる前のゴミが与えられた笑顔と感動そのもの…

そして、ご一緒した「お天気村」の山田さんの「人間・こんぺいとう」論という素晴らしい考え方は子ども達への接し方のみならず、すべての人間に勇気をあたえてくれる考え方、まるでスマップが歌う「世界にひとつだけの花」に通じる素晴らしい「ところ」に出会った！すばらしい学び…

○ 山東町スノーアートまつり

クリスマスソングを聞きながら「よったり」のあり方や企画を考えていた12月、メンバーの竹腰さんの住む地域の自然（雪）と人のそして山東の「生活文化」を集めて切り口は「スノーアート」、打ち合わせは数回…。現実に親子が宿泊できる「まつり」を実現するために竹腰さんの大変な努力とともに地域の人々の思いを情熱の輪が広がり、どんどんと自主的な計画に発展しPlanからDoへ。このまつりを成功させたのは山東の人々の熱い想いの結集力、そしてそれをリンクした竹腰さんの「地域プロデューサー」…

雪も山も池も田楽と味噌も、ルッチの美しい歌声もわらじづくりも、山東町の贈りもの＝山野のクラフトも、盆梅「想いのまま」も、そして…みんなまとめて「冬の上東町はあつたかかつた！」

（よく雪が降ってくれました…）

いろいろあつたけど、それが「グループ活動」をすることの学び

山東町は「蛍の里」として夏はにぎわっている。三島池の逆さ富士の夕映えは地域の宝、ぜいたく煮は保存会の知恵、わらじづくりも盆梅も継承されて…

真冬のまつりに発展すれば「山東町の生活文化」を集めたエコ・ミュージアムに…

なんて、まかれた種（シーズ）が芽を出すように…必要なときにはまたまた「よったり」かもと！

○ 文化サロン

滋賀県・淡海が伝承すべき、継承すべき「生活文化」の特質、自然も人も豊りしすべ
てを！開発されていないからこそ可塑性を持った産業も経済も政治も自治も一資源の
観察から発見、学びも福祉も協働も一語りから生まれる発見・興すこと次世代へつな
ぐこと、想いを集めて「文化サロン」、あちらによったり、こちらによったり…。先
人の皆さんの団体・個人ともよったり、よったり…

結論は出さなくとも、「目からウロコ」触発されて勇気付けられて、元気を出し合っ
て、よったりよったり…。

Hitoroku

ひと録

グループ全体概要
県内塾生分布図・ひと録シート

個別研究

●「まちづくり」異論く草津宿・間の宿
(立て場)から見る接触史／交通史

福村幸子

●中仙道守山宿町屋ふれあい館「筆忠」
の取り組み

原田秀雄

●環境学習情報

後藤英夫

●じぶん録 人のつながり研究

石川悠子

●バブ(パブリシテイ)のすすめ

高橋博

グループミーティング開催記録

目次

ひと録

メンバー：石川悠子、原田秀雄、福村幸子、後藤英夫、高橋博、糸井豊美、青山裕行

本グループのねらい：地域プロデュースを互いに実践しあうこと

本グループの活動経過：

●当初考えていた人の電話帳「ひと録」づくりとは？

「人と人を結び付けるために何が必要か？」。

ひと録グループは、当初この問いをもってスタートした。

「これから何か活動を始めたいが何から始めてよいか分からない」「人の情報を求めている」といった要望に応える「市民活動をやっている人の電話帳」のようなものがあれば、身近なところで人の情報が手に入り、求めているキーパーソンに行き着くのではないか？

そんな仮説を元に、手始めとしてまずメンバー自身や未来塾生の活動を紹介するシートをインタビューしながら作り始めた。それらのシートを「ひと録」と名づけることにした。

●ダメだし～運営委員から研究テーマ不適切という指摘を受けて

昨年10月26日に迎えた中間発表では、それまで収集したひと録シートおよび未来塾塾生の県内分布図を作成して発表した。ところがその際、運営委員より「ひと録のようなものは、そもそも地域プロデューサー養成塾であるこの塾で作るようなものなのか？」という指摘を受けた。

●研究テーマの見直し～「ひと録」づくりというテーマを発展的解消

根本から覆すような指摘を受けて、会議を重ねるなかで出てきた意見は、以下のとおりである。

- 1、未来塾に入って来る者は、すでに活動を行っている者、塾に新たな何かを求めにきている者もあり、必要とする情報は違う。
- 2、シート作成時のインタビューを行う事により、今まで知らなかった情報を得ることができ、地域の課題を発見するためのスキルとしても有効と考えられる。
- 3、「ひと録のようなものが欲しい」という社会的ニーズをどれだけ探ったのか？
- 4、なぜ人をつなげるのか？ 人をつなげればいいっていうものでもない。カタログ・ショッピングではないのでは？

- 5、ひと録は市民活動の基礎資料として必要と感じ、そういったものがないので作ろうとしたが、目的は名簿作成ではなく「ひと録」(人脈・人的ネットワーク)を使ってどう地域の問題解決に、問題を掘り起こし、提起し、解決に向かえるのか? また、その組み立てをするスキルとその行動をバックアップする人的ネットワークの研究が「ひと録」の研究テーマでは?
- 6、「ひと録」は未来塾始まって以来のグループであり、地域プロデューサーの育成講座としての未来塾本来の形だ。グループでNPOを立ち上げるのも大きな成果の出し方だが、個々の課題を研究する、そのスキルを学ぶ、また仲間と連携を図る、そして地域のことを考える自分を研いて行くことも重要である。
- 7、グループ内のネットワークがうまく形成できていない。その理由は当初、無理な班分けをしたことが大きい。その結果、以降、グループ会議への無断欠席、メーリングリストでの無反応といった問題が未だに続いている。
- 8、「地域プロデューサー像」が各自ちがう。
(7、8のネットワークの失敗を、今後、石川の個人研究テーマとすることにした)

●グループ全体のねらい「地域プロデュースを互いに実践しあうこと」へ方向転換

会議で検討を重ね、上記のような問題を継続的に抱えていた結果、グループ全体で共有できるテーマを見つけ出す事が難しいことを痛感するとともに、各々が個人研究を行う事により、幾つかの方策が見出せるのではないかという結論に達した。

時を同じくして、未来塾1～5期生の連携により塾生名簿の作成が始まったため、市民活動人の電話帳「ひと録」そのものを制作することは、やめることにした。

卒塾後はどうせ地域プロデューサーとしてひとり立ちせねばならないのだから、他のグループよりも一足お先に卒塾後を想定し、一人一人が実際に地域プロデューサーとして、いまから実践し、グループ内でそれぞれが個別にプロデュースの実践し合うことで、学び合うことが、このグループ全体のねらいである。

個別実践テーマ

- ◇ 福村: 「まちづくり」異論～草津宿・間の宿(立場)から見る接触史/交通史
- ◇ 原田: 中山道守山宿町屋ふれあい館「筆忠」の取り組み
- ◇ 後藤: 環境学習情報
- ◇ 石川: じぶん録 ひとつのつながり研究(ひと録グループの失敗を具体事例として)
- ◇ 高橋: パブ(パブリシティ)のすすめ～存在価値を高めるPRの方法・現場考【資料参加】

「まちづくり」異論

草津宿および梅ノ木立て場に見る接触史／交通史

福村幸子(4期生・ひと録) 2004年3月7日

課題

かつて東海道と中山道の唯一の分岐点として賑わいをみせた草津宿周辺の商店街では、サラリーマン化による廃業、大型店の進出などで商店街の空洞化が進む。

草津宿界隈の再活性はいかにして可能か？

●ねらい●

草津あるいは街道の国近江の、湖上・地上を行き交ったモノ・人・情報などとの接触や関係の歴史そのものを生かす

「多元文化の土壌・草津宿界隈」をキーワードにした複眼的企画を行なう。

江戸時代、草津宿はただの宿場町ではありませんでした。京都と江戸を結ぶ東海道と中山道が、日本で唯一合流した分岐点でした。しかし、現在の草津宿周辺の商店街は衰退したりしています。今後、草津宿界隈の再活性はいかにして可能でしょうか？

「最良の預言者は過去である」といいます。まず、この道、分岐点をどんな人物が草津宿界隈を行き交ったのでしょうか？

◆1966年に滋賀県の旧家から発見 怪醜(かいしゅう)の画家・曾我蕭白(1730-1781)「群仙図屏風」

これは1966年に滋賀県の旧家から発見された、江戸時代の画家・曾我蕭白の「群仙図屏風」という度肝を抜く最高傑作で、非常に大きく4m近くもあります。あまりに奇妙な絵描きであるがゆえ日本では見向きもされず、国外流出が進んでいました。ところが、この絵が滋賀県の旧家から発見されたことで蕭白再評価のきっかけとなり、いまでは文化庁が手放しません。クローズアップしてみると中央にいる、叫んでいる人物の衣の裾は、岩なのかそれとも服なのかといったいなんなのかわけがわからず、また、画面全体に痙攣しており、色彩もとても独特な色使いをしています。もしこ

1 東海道と中山道の宿駅・関所





んな絵が自分の寝室にあれば、おそらく悪夢を見そうなほど異様な迫力があります。わたしはこの曾我蕭白が好きですが、その理由は根底に精神の憤りがあり、そ

れを創作へと昇華していったアーティストだったからです。

今から 250 年ほど前に活躍した蕭白は、自分は中国の皇帝の子孫であると絵にサインしたり、奇人変人であることを演じつづけ、また常に世の中に対してぶつくさ言っていました。蕭白は京都の紺屋に生まれ育ちましたが 17 歳で両親を失い天涯孤独の身となりました。それを救ったのが、当時、京都の儒学者達に流行していた老荘思想や陽明学左派の影響を受けた「憤りこそが創作の契機だ」という思想であり、蕭白はそんなネットワークを持っていました。

なぜ京都出身の蕭白の絵が、滋賀県にあるのでしょうか？

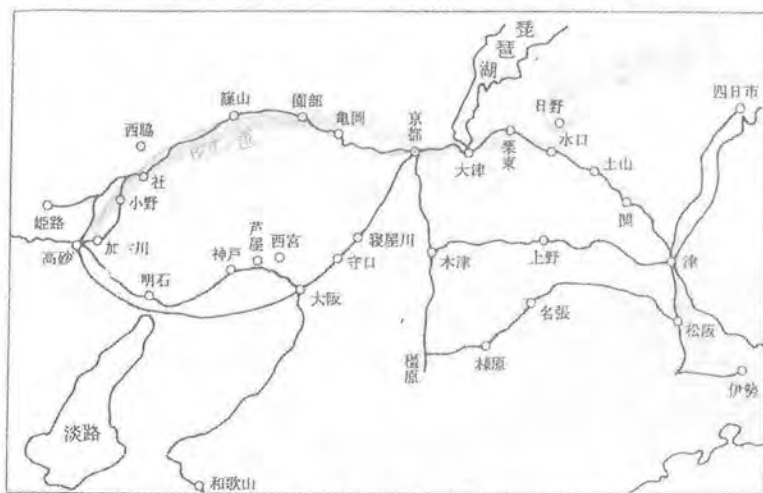


図11 蕭白の行動地図

左図をごらんください。江戸時代の画家は旅をすることで創作の肥やしにしましたが、蕭白もまた兵庫県から伊勢へと移動しています。当時の移動手段は徒歩でしたから、その過程で滋賀県へも立ち寄っています。栗東市六地藏の薬屋和中散本舗でも、蕭白の襖絵がありますが、蕭白はここに1ヶ月滞在して宿代代わりに絵を描いて置いていったからでした。

◆東海道の草津宿—石部宿のあいだにある間の宿・梅ノ木立場(現・栗東市六地藏)

二つの宿駅間にある休憩地点を間の宿(あいのしゅく)と呼びます。梅ノ木立場と呼ばれた和中散本舗のある周辺は中心市街地として賑わっていましたが、明治 22 年に鉄道が開通し近くに手原駅ができると、手原駅から徒歩 30 分離れているだけで急に衰退しました。このように鉄道開通は、広域交通路の位置や人々の交通手段を変化させ、大きな影響を与えました。

しかし、草津宿にはまだ民衆の歴史が随所にあります。

◆草津宿DEEPツアー

2月11日に、崎村商店の崎村宰滋さんにガイドをお願いして、知られざる草津宿を探訪する企

画「知られざる草津宿DEEPツアー」を開催しました。崎村さんは地酒「草津の宿」などをプロデュース販売しておられ、草津宿のみならず、全国の宿場などもご自分の足で歩いておられます。草津宿といえば本陣が観光の定番ですが、崎村さんのご案内では4時間かけて、現存する遊郭跡(写真)や、草津川の渡し周辺にある地蔵や、江戸時代の瓦屋といったあまり知られていない場所を、心を込めて紹介してくださいました。



草津宿街道交流館の八杉淳さんによると、草津宿の旅籠で宿泊した庶民の旅行者は相部屋だったので、部屋で見知らぬものどうしが旅の話や国の話、そして農業技術などの情報交換をしていたといいます。

そのように街道の国近江のなかでも、とくに東海道と中仙道の唯一の分岐点・草津宿界隈とは、物・人・情報が往来し、異質な者どうしが接触し新たな情報を生む、いわば多元文化の土壌でした。たとえ、彦根城のようにわかりやすく大きなシンボルが現存せず歴史的都市格が高くなくとも、草津宿にはそれがあります。

歴史はいまに活かさなければ意味がない、ということを経験から学びました。多元文化の発信地としての可能性を秘めた草津宿という空間を再発見するプロジェクトを今後も続けてまいります。

多元文化の土壌 = 草津宿 = 唯一の東海道・中仙道の分岐点 異質なものどうしが接触し新たな情報や価値を生む、交流地点 (人・モノ・情報) ⇔ 自文化中心主義(「滋賀らしい文化」など一元化) 新しい文化とまちの活気とは、多元文化なしでは生まれません。

参考資料

取材協力

■近江歴史回廊大学 ■草津宿街道交流館(八杉淳学芸員) ■株崎村商店(崎村幸滋さん) ■大角家・和中散本舗

マップ

▼草津市「くさつ歴史発見地図」 ▼草津市街道情報センター「草津宿」「近江の街道」1996年 ▼栗東市「栗東ガイドマップ」
▼近江歴史回廊「宿駅散策・近江東海道中絵巻1/土山-石部編」 ▼近江歴史回廊「宿駅散策・近江東海道中絵巻2/栗東-大津編」
▼近江歴史回廊「宿駅散策・近江中山道中絵巻1/柏原-高宮編」 ▼近江歴史回廊「宿駅散策・近江中山道中絵巻2/愛知川-草津編」 ▼草津市観光物産協会「草津宿見どころ食べ処」

図書

●小林保夫・八杉淳「宿場春秋」角川選書 平成12年 ●八杉淳「宿と情報」『東海道53次と草津・浮世絵の世界』草津市教育委員会 平成元年 ●八杉淳「2 ふんかとじょうほう」『宿と街道・草津』草津市 平成8年 ●田中慶希「資料集・滋賀県の交通史」平成7年 ●草津市「ずっとKUSATSU(歴史写真集)」平成8年 ●栗東歴史民俗博物館「近江の街道」平成13年 ●児玉幸多編「日本交通史」吉川弘文館 平成4年 ●草津市「草津市史②」昭和59年 ●滋賀県「滋賀県史昭和編④商工編」昭和55年 ●永野全雄ほか監修「目で見える湖南の100年」郷土出版社 1992年 ●草津宿街道交流館「鉄道たび物語」平成15年 ●狩野博幸「曾我蕭白」新潮日本美術文庫 平成9年 ●「週刊日本の美をめぐる〜奇想の画家・蕭白と蘆雪」小学館 2002年

ホームページ

●<http://chushinshigaichi-go.jp/> 中心市街地活性化推進室 ●<http://www5f.biglobe.ne.jp/~tenpul/chirori/yousu.htm> ●<http://popo.or.jp/> たんぽぽの家 ●<http://www.japanshop.net/> 日本の商店街

原田 秀雄

筆忠は、旧中山道守山宿のほぼ中央に位置する山中蠟燭店の店主と地域住民の有志が、「このままでは、「宿としての町並みや地域の結びつきがどんどん失われていく」「何でもいいから出来る事から始めてみよう」そんな思いから、2003年7月歩み始めました。

生活は豊かになったけれど・・・

私たちの生活は、豊かで便利なものになりました。コンビニやデパートには“モノ”が溢れています。しかし、本当の意味での豊かな生活を送るためには、単に物質的な豊かさではなく、精神的な豊かさこそが大切なものではないでしょうか。

心豊かな生活を送るために必要なもののひとつとして、“人と人とのコミュニケーション”があげられると思います。特に近年のライフスタイルの変化から、近隣住民との交流の機会が昔に比べ著しく少なくなりました。また核家族化も進んだことから、世代を超えた交流の機会も少なくなってきました。

心のユニバーサルデザイン

その土地や地域に伝わる文化や、昔ながらの遊びや習慣など、沢山の貴重な知的文化的財産が、伝承されることなく消えていこうとしています。

文化の伝承や情報の交換、さまざまな活動の中心として、誰もが自由に利用でき、憩いの場ともなるような空間があればよいのではないのでしょうか。与えられたものを利用するだけでなく、地域の人たちが自分たちで創り出していき、それがエネルギーとなり、ひとり一人の生活、そして、地域・まち全体を彩りあるものに変えていくはずです。

また、子供から高齢者、地域の人々と来訪者、さまざまな人々が交流することによってお互いを理解しあいことが心のユニバーサルデザインであり、“人と人”がつながっていくこととなります。

交流の場としての空間

では、人と人がつながりをもてる交流の場として、ふさわしい空間とはどのような空間でしょうか。まちの人たちが実際必要としているものは、どのようなものなのでしょうか。

今回の取り組みでは、調査・研究をしながら活動を行い、その結果から更により方向性を見つけていきたいと考えています。

永く存続させていくためには、様々な経費が必要となってきます。それを賄う方法として、ボランティアの力を借りる、NPO法人化や行政からの助成金などがありますが、この事も併せて研究していきます。

なぜ町屋なのか

交流の場として、まず人が気軽に足を運べる展示会や、講習会が開けるようなスペースが必要になります。空き店舗の利用も考えられますが、人々が安らぎを感じられるような場所として、町家の利用を考えてみました。

町家は日本の貴重な財産です。その文化にふれ、また保存・伝承していく意味でも、町家を利用し人々の安らぎと交流の場として利用していきたいと思えます。



ふれあい館“筆中”の誕生

当然、この町家の利用は持ち主、或いはお住まいの方の理解と協力が不可欠となりますが、今回の取り組みでは、旧中山道守山宿の中央に位置する、蝋燭店主山中氏の協力を取り付ける事ができ、居住空間を侵すことのない範囲という制限があるものの、2階部分の提供をいただきました。

山中氏の屋号“筆忠”を使わせていただき、ここに中山道守山宿町家ふれあい館【筆忠】が誕生しました。

この活動は、一部の人々によるものでなく、「サポーター」とよぶメンバーを軸としながら、学生や地域住民や来訪者みんなで創り上げていきたいと考えています。

運営する側/利用する側という一方通行的なものでなく、ひとり一人が自分にできる方法で参加することが重要であり、それが息の長い活動、地域の活性化につながっていくのではないかと考えています。

いろいろな事が考えられます

◇ 憩いの場として・・・

誰もが自由に利用できる、

休憩と交流を兼ね備えたスペース

- ・ 一人暮らしや高齢者の交流の場
- ・ 子供たちの遊び場
- ・ 待ち合わせ場所



山中のお爺さんも監督です



室内を模様替える県立大生



1階のお店も掃除しました

展示・発表の場として

趣味や特技の発表の場としてたくさんの人に見ていただき、同時にそれを見る事で新たに興味を持つ人たちが現れてくるかもしれません。

- ・ 音楽の演奏会



南中学校 吹奏楽部のアンサンブル

もっとお客さんが多いとよかったです

こどもたちにフォークソングは
ちょっと難しいかもね？



・趣味で作ったものの展示



年末の“もりやまいち”と同時に開催しました

◇ 情報交換の場として

人が集まることでそこには、常に様々な情報交換の場となります。せっかくの特技や知識・経験を眠らせている人も沢山いるはずですよ。地域の人たちに教え・学ぶことで、新たな交流が生まれ、充実した時間を過ごす事ができるのではないかと。

- ・ 井戸端会議所
- ・ 文化教室
- ・ 子育て、環境その他の相談

地元の女性の方々を中心に、地域（本町自治会）の問題を不定期ではあるが、話し合っ行ってこうという取り組みを検討しています。

「自分たちの“まち”のことを自分たちで考えて見よう」という機運が高まることを望んでいます。

これからの【筆忠】***

私たちの身のまわりには、有名な先生や特別な資格を持った人でなくても、素晴らしい知識や経験を人たちが、たくさんいるのではないのでしょうか。その方たちの知識や経験をほんの少し自分の生活の中に入れるだけでも、人生が豊かになることではないでしょうか。

また、教える側も充実感や生き甲斐を感じられるのではないのでしょうか。まちの人々がお互いに教えられ、それが「交流」であり、大きなエネルギーとなって広がっていき、地域の活性につながっていきます。

中山道守山宿町家ふれあい館【筆忠】の取り組みも始まったばかりです。

NHK 天津放送局や新聞等でも紹介をいただき、地域の方々にも少しずつ知ってもらえるようになりました。

しかし、多くの課題や問題点を見つけることができました。

- 人と人がつながりを持てる空間とはどのようなものなのか？
- 筆忠を利用する人たちが必要としているものは何なのか？
- 永く活動を続けていくために、必要となる様々な経費（お金）をどのように捻出していくのか？
→「サポーター」と呼ぶボランティアの確保、NPO法人化、行政等からの補助金、これからの活動に必要であればなりません。

筆忠が、敷居が低く、誰もが気楽に利用でき、人と人の交流を通じてまちに活力が与えられるような空間のように、これからもゆっくりではあるが、

○地域の人たちと一緒に、自分たちの“まち”のことを自分たちで考える。

○人とひとの交流を通じて、人生を豊かに、“まち”に活力を。

を考えながら、自分たちの身の丈にあった活動を続けていきたいと思ひます。

2004/03/27

おうみ未来塾 第4期生

後藤英夫

自己紹介

現在の所属団体

NGO 環境しがの風 代表 滋賀大学教育学部教授 川嶋宗継

NPO 気候ネットワーク 代表 弁護士 浅岡美恵

NPO ヒマラヤン・グリーン・クラブ 代表 遠藤京子

NPO日本ボランティアコーディネーター協会 代表理事山崎美貴子

現在の役職

滋賀県環境自治推進員 第3期（県知事委嘱）

滋賀県地球温暖化防止活動推進員 第1期～第2期（県知事委嘱）

滋賀県環境啓発アドバイザー（県登録）環境セミナー船 講師・環境教育講師

「湖の子」サポーター 滋賀県立フローティングスクール（登録）

滋賀大学教育学部附属環境教育湖沼実習センター客員研究員

等地球環境保全のための学習担当として多忙な日々を過ごしています。

未来塾で得たもの

地域社会の課題の発見

政策化の提言可変性を持ったカリキュラム

幅広いネットワークの形成

地域プロデューサーの資質と役割

交流を通じて多くの仲間を知る

リーダーシップ

卒塾にあたって

後輩達に望むことは、グループ分けについて、自分の到達する目的は何かを良く考えて所属グループを考察する。この問題は、安易に考えず先送りしないことです。

これは、自分の反省から申し上げ

地域への想い推進

NPO環境学習推進情報プロジェクトを立ち上げる

現在、市民団体で活動中であり、環境ボランティアコーディネートを実践している

今後は、地域プロデューサーを目指して地域活性化に貢献していきます。

ボランティア学習とは

学校週5日制

「生きる力」

学力低下論

基礎・基本の徹底

発展的な学習

総合的な学習時間

体験学習

観点別・目標準拠評価（絶対評価）

教諭の平均年齢の上昇

少子化

ボランティア活動の領域

- ① 社会福祉 ② 自然・環境 ③ 国際交流・協力 ④ スポーツ ⑤ 教育 ⑥ 保健医療
⑦ 消費生活 ⑧ 文化 ⑨ 地域振興 ⑩ 人権 ⑪ 平和 ⑫ 情報技術（IT） ⑬ 災害
⑭ ボランティア推進 ⑮ その他

ボランティア学習が求められてきた背景

児童・生徒を取り巻く課題（心の教育、生きる力など）

学校教育のあり方（知識注入型教育への批判）

ボランティア活動の急速な普及

社会の価値基準の変化（バブル崩壊後）

生涯学習の政策との関連（いつでも、どこでも、誰にでも学習の機会はある）

ボランティア学習とは

さまざまな社会生活の課題に触れることにより、公共の社会にとって有益な社会的役割と活動を担うことで、学習者の自己実現をはかり、さらには自発性を育み、無償性を尊び、公共性を身につけ、よりよき社会人としての全人格的な発展を遂げるために行う、社会体験学習です。

おうみ未来塾の感想

諸先生方の講義がわかりやすく、この塾で2年間学習させていただいたことは幸せであったと感謝しております。また、事務局の方々にはいろいろお世話になりましたことに感謝いたします。諸先生方ならびに事務局の方々本当にありがとうございました。

環境学習情報センター（または環境学習プロジェクト）は、学校・企業・地域を結ぶ拠点として、「みて、ふれて、楽しく学ぶ」をテーマに未来の地球までタッチパネル方式で楽しく学習が出来る仕組みを考えています。私たちは、県環境自治推進員・県地球温暖化防止活動推進員・県環境啓発アドバイザー・「湖の子」サポーター・滋賀大学教育学部附属環境教育湖沼実習センター客員研究員を初めとした地球環境保全のための学習担当として非常に多忙な日々を過ごしています。

学校や企業そして地域の団体からの申し込みで出前講座にも出かけます。他方面の講座に関わっているのですが、今回の発表は学校との関わりについて述べさせていただきます。今までの経験から小学生・中学生がもっとも多く利用されています。プログラムも大気・省エネルギー・水質・地球温暖化防止対策・ゴミ・リサイクル環境家計簿・環境と経済学・環境にやさしい消費者講座・雨水利用講座・子どもの経済学習・ボランティア学習等の各講座を開講し、申し込みをいただき打ち合わせ後、参加型の体験学習の講座を開始します。こどもたちとコミュニケーションを大切に、こどもたちからいろいろ引き出す方法で進めることが多いです。そして、開催講座が出来ればもう一度、学校に帰って自分たちは何が出来るか、「ふりかえり」の確認をさせています。

Why

関心のなかった層に
環境に関心をもって
もらう

Who

定年退職前後の
男女性

How

学校・PTA・OB会
地元企業等との協働企画
実務経験を生かした
ボランティア体験

Who

20～30代の社会人

How

楽しさがアピールできるもの
達成感のもてる内容
地元企業をまきこんで

What

興味のある分野は何か？
地域とのつながりをもてる
テーマ設定

When

現役も人も参加できる日曜日
年度がかわる時期
Weekday (night)
土日や夏休みのtimeに合わせる

What

ボランティア活動へのイメージ
を一新するもの

Where

交通の便利なところ
地域住民が日常的に
集う場所で

Where

交通の便利なところ
フィールドワークが
出来る場所

じぶん録 人のつながりと協働について

ひと録グループ 石川悠子

出会いから協働へ

◆ひと録の活動を振り返る

- ・月一回程度の例会
- ・参加者2～5名（全員で集まること無し）
- ・グループでの実地検分、催しや交流会の開催等無し
- ・メーリング・リスト開設したが、提案、連絡等に対しての返答があまり無かった
- ・グループでの研究発表ではなく、個別の研究発表で卒塾を迎える

ひとのつながりを研究するはずの「ひと録」がつながれなかった、協働できなかったのは何故だったのだろうか？

わたしたちは協働の場を持たなかったからではないか？

1) 自分の場と協働の場

人はそれぞれに自分の場（図1）を持っている。

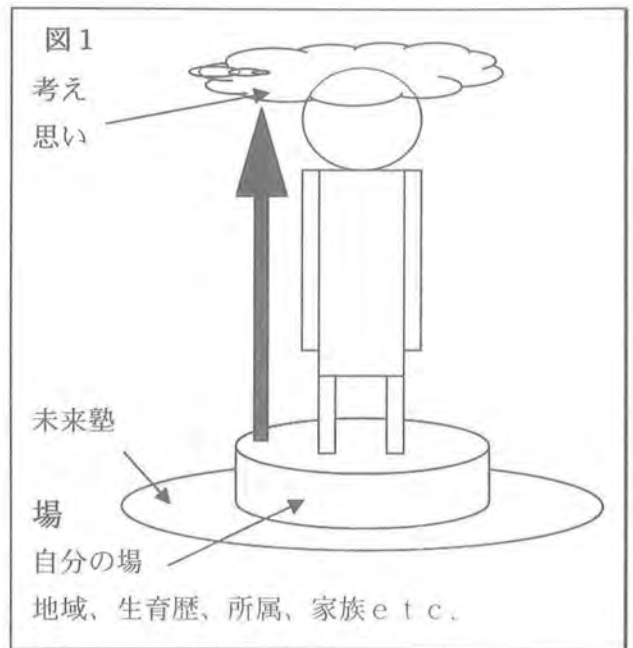
場とは、例えばどこの地域で生まれたか、
住んでいるか、
どういう生育歴か、
組織のどんな役職か、
家族はどうか など



それぞれの考えや思いなどが形成されている。

2) 協働の場はなぜ必要か？

場から考えが形成されると仮定すると、考えだけをまとめようとしても、まとめたつもりになってもまとまっていない。



3) 協働の場とは？

表1

グループのメンバーで過ごす小さな部屋のようなもの？

- ・自己主張ではなく聴き合うことになる。
- ・自分のためだけの荷物（自己中心の考えなど）は持ち込めなくなる。
- ・自分が中心ではないことや、どこが自分の位置かが分かってくる。

4)協働の場はどうしたら作れるか？

cf. { 就職…利害関係、毎日出かける場所がある
 家庭…愛情関係、法的拘束、毎日帰る場所がある
 未来塾のグループ…自発性のみ

① ともに働く場へ誘うもの

★楽しい、おいしい

cf. 2期生 くいいじ「楽しいおいしいで人は動く、じっとしていても何も始まらない」

★おもしろそう、やってみたい

cf. 子どもの遊びエネルギー…既存の価値観を超えることができる、成長のエネルギー

★居心地の良さ 本音、自己開示

② 固めるもの

★時間をかける

cf. 3期生 てんしょく「畑の野菜はゆっくり育つ、まず仲良くならなくちゃ」と、食べて飲んで草取りして最初の4ヵ月を過ごした。

★記録、連絡、報告、相談・・・自発性だけのつながりだから、最重要！。メールはまだ発展途上。全員に届くMLは、返事しなくても良いという、欠点もある。電話やFAXで補う必要もあり。

★一緒に働く、作る 頭ではなく手や足、身体で協働の楽しさを知る

★実在の場（筆忠、草津宿）とつながる 地域愛

③ 広げるもの、高めるもの

★志、ミッション・・・星のように遠くにも届くもの、あってもなくても分かりにくく意識しにくい、一番大切なもの。未来塾という志。

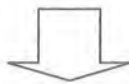
表1

協働	個人
意見の一致	意見内容の吟味
聴く力	説得力
雰囲気	内容
自己開示・本音	自己完結
時間がかかる	短時間でもなんとかなる
絶対対等	自分が大将
自分の位置を知る必要がある	自分が中心
吹奏楽	カラオケ

5)協働をイメージする

吹奏楽？

演奏し、技量を高めると同時に、沈黙し周りの音を聴くことが重要



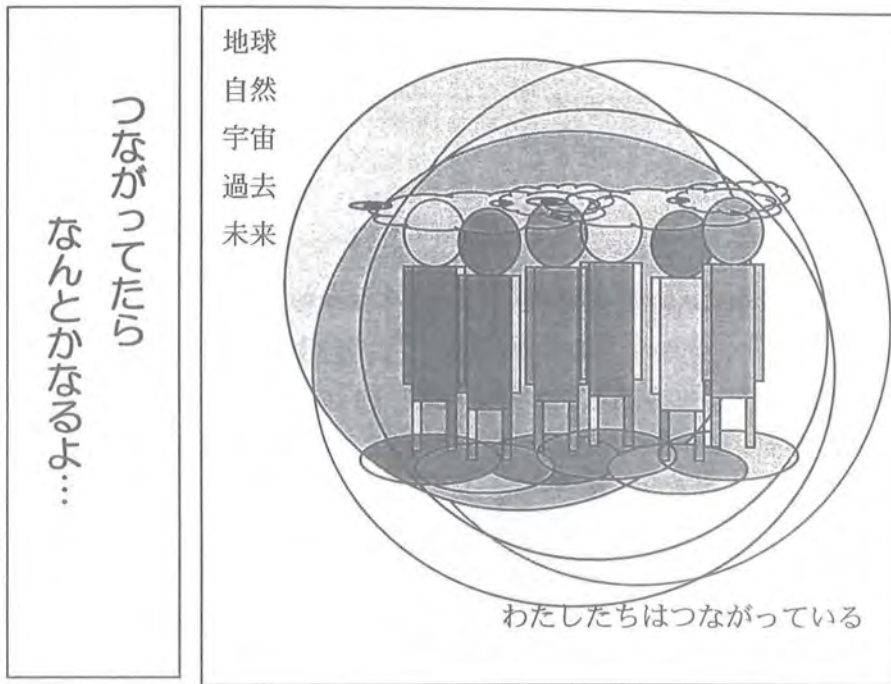
地域プロデューサーのイメージへ

団員の出す音を聴いている
 目指すもの（どんな音楽にするか）が分かっている
 演奏に加わりながら、全体を動かしている

指揮者、コンダクター

人間の体内ではそれぞれ独立した細胞が、協働して働いている。
 人間にとって、

協働することこそが使命なのかもしれない。



⇒ 協働へ

- ・つながりを意識する。
- ・お金や権威に代わる価値あるもの。
- …つながり、協働



←「おいしいものつながり」2003. 10. 22 at てんしょく

参考資料

- 清水 博「場の思想」東京大学出版会 2003年
- 佐藤郁哉「フィールドワーク 書を持って街へ出よう」新曜社 ワードマップ 1992年
- スーザン・ソング「隠喩としての病い」みすず書房 1982年

取材・活動記録(今回の個人テーマ研究の基礎となったもの)

- 2003. 10. 9 ◆4期生 大林さん取材 安土町 「安土出陣太鼓」練習
- 2003. 10. 18 ◆4期生 小林さん取材 歌のボランティア「ゆめたまご」草津市 草津ケアセンター
- 2003. 10. 22 ◆2期生 永野さん、幡さん、馬場さん 3期生 山口さん
「おいしいものつながり」開催 草津市 てんしょく事務所

「地域プロデューサーのパブ（パブリシティ）のすすめ」
～存在価値を高めるPRの方法・現場考～

高橋 博（おおみ未来塾4期生、所属グループ：ひと録）

ひとはコミュニケーションの中で発達してきた。

コミュニケーションとは「社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える各種の物を媒介とする。」と広辞苑にある。つまり、人間社会の発展に欠かせないのがコミュニケーションと言える。そして、コミュニケーションはひと一人では存在しない。相手があって始めて成立するものである。

そのコミュニケーションの手段にパブリシティ（広辞苑：一般に広く知らせる事。周知）がある。人知れず秘密主義の生き方をする人は別にして、人間は社会生活において程度の差こそあれ、自己表現の手法としてのパブ（パブリシティ）は欠かせない。まして、地域プロデューサーとしての資質条件に“パブ上手”は必須のものと言えるであろう。

「ひと録」の存在はそんな人と人をつなぐネットワークを研究する、そしてそれぞれ実践される（存在価値のある）行動を発信される情報から集積し、人的ネットワークを構築する。また、その情報発信能力（パブリック・リレーション）を高める研究をすることが一つの課題と言える。

未来塾卒塾にあたり、地域社会の持続的発展と自立に向けた地域プロデューサーとしてのコミュニケーションを高めるためのPR方法を考察する。

■ 存在価値とは社会の基盤？ 地域プロデューサーの意味？！

今さら存在価値のない地域活動や個人活動を論じる必要はない。少なくとも、個々に関わりをもつ地域活動や個人の行動が社会に何らかの影響をもたらす時に、その活動や行動の社会的価値が生まれる。その社会的価値こそ存在価値であり、この価値の積み重ねが社会の基盤になると言える。

今、地域社会の持続的な発展と自立のために、この自主・自発的な社会的価値のある行動の創造が求められている。公的財源で推進される全体主義的な公共事業に代表される社会基盤整備から、真に社会的に必要な公共事業は別として、その隙間を埋める小さくとも社会的価値のある行動や活動の積み重ねが求められる時代に変化して来ていると言える。これは「中央から地方へ（地域へ）」の時代の趨勢の具体的展開であると言える。

つまり、この行動や活動を推進する人的資源が「地域プロデューサー」と言える。

■ 社会の進展に欠かせないコミュニケーションとパブリシティ

社会的価値のある行動や活動を個人から複数へ、そして社会の組織（システム）として活用・発展させる事が地域プロデューサーの大きな役割である。

そして、この行動や活動を増幅し、発展させる手段として情報発信（コミュニケーションの拡大・広報活動）機能が必要となる。

こうした意味からも、地域プロデューサーとしてこのコミュニケーション

を広げる大きな手段の一つとして「パブリシティ」と言う“情報発信手法”とその能力を身に付ける必要があると言える。

■ 自己表現のパブのすすめ

パブリシティ（以下パブ）とは、一般的には「企業や組織が自ら作り出した製品やサービス、また文化活動や社会貢献活動などの情報をマスメディアに取り上げてもらうために働きかける行動」（広報活動）と言われる。

最近では、このパブと言われる広報活動手法を、企業や公共団体だけでなくNPOや個人も含む広範囲の組織が活用するようになって来ている。マスメディアを使う事により、より多くの人にその存在を知らせ、その存在価値を高め、自らの行動や活動を広める手段にしている。

地域プロデューサーとしては、このパブリシティ手法を自らの行動や活動の自己表現手段（広報活動）として活用し、社会的な共感を醸成し、社会に必要な存在にしていく事が大切と言える。

また、パブはマスメディアが報道素材として記事や番組に取り上げる形が多く、社会的信頼度も高い評価が得られる広報手段であると言える。

（一方、マスメディアを使う方法に「広告」と言う手法があるが、基本的に広告は有料でありパブは無料であると言う点が大きく違う点である。）

■ メディアが欲しがると自己発信型のパブ（プレスキットのツボ？）

多様化・多元化する社会情報は、その情報をメディアに載せる人たちの収集能力を超えて存在するようになって来た。日々発生する社会現象に加えて生活に密着した情報が溢れている現代社会は、情報媒体機能の発展とともに高度情報社会という複雑な社会を生み出している。新聞や雑誌の紙媒体、ラジオ・テレビの電波媒体と言う既存メディアに加えて、ここ数年のインターネットの驚異的な発展は情報の流通構造を根本的に変えて来ている。

こうした多様に変化する情報社会で埋没しないために、いまこそ自己発信型の情報発信能力を高めることが大切なことは言うまでもない。そして、膨大な情報を機敏にキャッチしようとしているメディア側に、適時・適切・適宜な情報を送り込むことが肝要であるとも言える。

そのために、プレスキットの作成手順（ルール）とコツをまとめてみる。

（1）プレスキットを作ろう

情報発信の基本は、いかに上手く情報を「まとめ」「伝える」かである。そのために、プレスキット？を作ることが、その早道と言える。

プレスキットとは、「ニュースリリース、投げ込み資料」等とよばれている報道機関への情報提供のツールであり、本来は官公庁や企業・団体・個人が“物事を報道機関に発表する時に作成される資料”を言う。

（2）プレスキットの基本

プレスキットの基本は、「発表テーマ」に対して5W1Hは必須である。

発表テーマ：伝えたい事象（物・行事・出来事・成り行きなど）の内容を出来るだけ簡潔にまとめ、リード（主意）をヘッドラインでアクセントをつける。

・WHO（だれが？）：主催者・発表主体など、情報源の出处の明確化。

- ・ WHEN (いつ?) : 日時やその期間など情報の時間的明示。
- ・ WHERE (どこで?) : 取材対象や情報を確認できる場所の提示。
- ・ WHAT (なにを?) : 発表テーマの主題。(長文よりも短文で箇条書き)
- ・ WHY (なぜ?) : 情報の目的や行動の動機。
- ・ HOW (どうする?) : それでどうする、または展望など。
- ・ お問い合わせ先 : これが明確なほど取材対象になりやすい。

この基本的情報に、資料(データ)や写真、地図や補足資料をつける。さらに、「今後はどうなる?」「どうしたい」などの物事や行動の先行きを記載しておけば完璧である。

(3) プレスキットのリリース

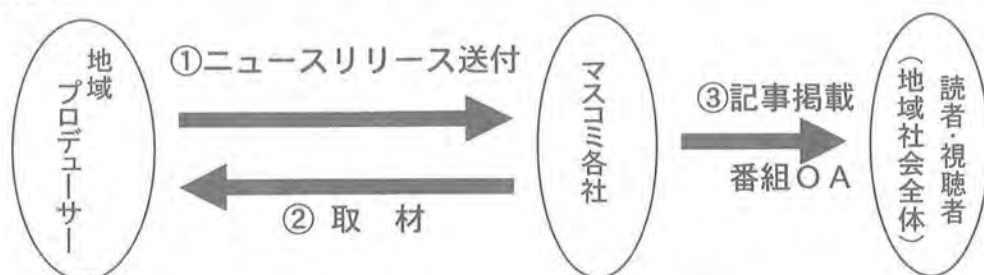
作成した「プレスキット」を有効に配布(リリース)するには、自ら報道機関(新聞社の支局やテレビ局・ラジオ局)に持ち込む(持参持込・郵送・メール)のが一番良いが、近くの市町村の広報関係部署に相談・持ち込むのも一手である。(おおむね市町村の広報関係者の手元にはマスコミの窓口の一覧が揃っている。内容によっては、記者会見の場所提供のチャンスもある。)

(4) 継続的なパブと結果リリースの繰り返しが決め手?

大きな(話題になる)物であれば、後は記者や取材者が連絡して来るが、小さなものは出来る限りこまめにパブを繰り返す事が必要である。その積み重ねが結果として存在価値を高める事になる。

■ マスメディアを利用して地域プロデュースを推進しよう!

常時マスコミ関係者とネットワークを持っておく事も大切である。特に最近ではインターネットによるホームページやメールマガジンなどを常時チェックする記者も増えた。自らのホームページの制作やメールの多用など、ITの利用も効果的である。HPのお知らせやML(メーリングリスト)にマスコミ関係者を加えるなど、情報発信を常に心がけ、①ニュースリリース(プレスキット)の配布・送付、②取材、③記事掲載・番組OAのパターンをイメージして物事を進める事が、出来る「地域プロデューサー」の基本的スキルと言える。

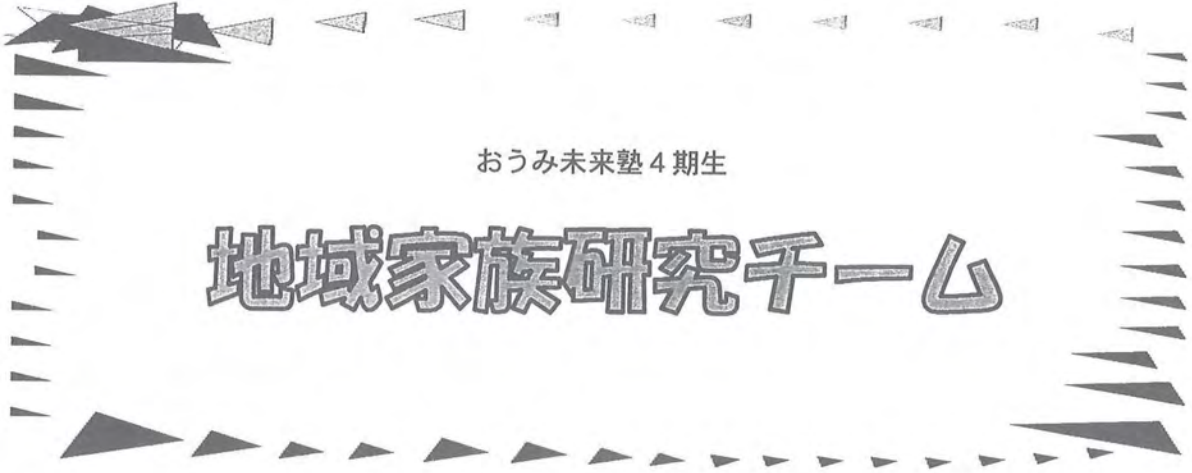


地域プロデューサーとして自らの行動や活動をPR発信することは、企業のIR活動とも相通じる広報活動であり、自らの活動や行動を自己点検する機会である事も付記しておく。

(2004. 2. 29: 記)

グループミーティング開催記録

開催日	開催場所	参加者	目的
2003年4月20日			例会
" 27日			同上
" 5月			同上
6月6日(金) 17:30~	草津まちづくりセンタ ー ふらっとサロン	後藤、原田、糸井、進、 青山	同上
6月20日(金) 18:30~	同上	原田、糸井、石川	同上
7月5日(土) 6日(日)	滋賀県青年会館(瀬田)	石川	未来塾1~4期交流会 出席 ひと録PR
7月17日	草津まちづくりセンタ ー 308会議室	糸井、原田、高橋、青 山、小林(福祉グルー プ)、石川	ヒヤリング講習会 講師:山口洋典さん (大学コンソーシアム 京都)
8月22日(金)	草津まちづくりセンタ ー ふらっとサロン	石川、青山、福村	例会
9月4日(木) 18:30~	淡海ネットワーク センター	未来塾4期	同上
9月19日(金) 18:30~	草津まちづくりセンタ ー ふらっとサロン	原田、青山、石川 (竹岡、木村)	同上
10月10日(金) 18:30~	同上	原田、糸井、青山、石 川、(竹岡、木村)	同上
10月26日(日) 13:00~	淡海ネットワーク センター	原田、糸井、後藤、 福村、石川	4期生中間発表会
11月12日(水) 18:30~	草津公民館和室	高橋、福村、石川 (竹岡、木村)	同上
12月2日(火) 18:30~23:10	草津まちづくりセンタ ー ふらっとサロン	石川、福村	同上
12月19日(金) 18:30~21:30	まちづくりセンター1 Fふらっとサロン	石川、後藤、原田、 福村、(木村)	同上
2004年1月6日(火) 18:30~20:30	同上	石川、原田、福村	同上
2月14日(金) 18:30~20:30	草津公民館研修室	石川、福村、幡(オブ ザーバー・3期生)、 (竹岡)	班全体概要の共同作成
2月22日(日) 10:00~12:00	まちづくりセンター ふらっとサロン	福村、石川、原田、 後藤、(竹岡)	会議及びリハーサル
2月29日(日) 13:30~	草津公民館研修室	石川、福村、原田、 後藤、	リハーサル
3月7日(日) 9:00~	淡海ネットワークセン ター	石川、福村、後藤、 原田、糸井	会場設営・卒塾発表



おうみ未来塾4期生

地域家族研究千一ム

提 中 富 和 (リーダー)

大 歳 はるか

小 林 由 季

谷 優

大 林 恭 子

小 山 久 子

松 田 達 也

おうみ未来塾 4 期生「地域家族研究チーム」研究報告書

1. 私たちの出発点

- (1) 地域での暮らしに関してメンバーが感じている課題
- (2) 地域における課題
- (3) めざす地域像
- (4) プロデュースの手法

2. 地域でのフィールドワーク（その1）

- (1) 地域で芽生えている事例から学ぶ
- (2) フィールドワークから見えてきたこと

3. 取組テーマの再構築

- (1) テーマの絞込み
- (2) 手法の具体化のための企画
- (3) 企画後の動向

4. 地域でのフィールドワーク（その2）

- (1) 愛知川町（株）協栄 代表取締役 青木久数さんのお話
- (2) 愛知川町大字中宿 木下良夫さんのお話
- (3) ブラジル食料品店フェリシダーテ（大津市一里山）の調査結果
- (4) 「滋賀ラテン学園」に詳しい古谷昌代さん（甲西町役場人権教育課）のお話
- (5) フィールドワークから見えてきたこと

5. まとめ ～「ご近所の外国人」と関わりあえる地域づくりにむけて～

（参考資料）

■関連する新聞記事

2004.2.10 毎日新聞「湖国の人たち」－滋賀ラテン学園アレシャンドレさん

■グループ活動の経過

1. 私たちの出発点

私たちのグループは、福祉、地域ケアに関心を持って集まった7人のメンバーである。

1年間の研究活動をどのように進めていくか、まずそれぞれが問題意識を持っている事柄を出し合い、地域でのつながりづくりにつなげるための企画内容を検討した。

(1) 地域での暮らしに関してメンバーが感じている課題

- ・ 専門家だけでは地域を支えられない。(例えば、「成年後見制度」)
- ・ 市民と専門家のインターフェイスが必要。
- ・ コミュニケーションの不足。隣近所の助け合いが困難になってきている。
(コミュニケーション可能な関係づくりには「鍋の単位」くらいがちょうど良いのではないか。)
- ・ 若い人も何かやりたいと思っている人はいる。「共に行動してくれる仲間や大人がいるかどうかわからないのでできない」という人たちを繋ぐことはできないか。
(例えば、青少年健全育成における「通学合宿」)
- ・ わざわざ何かしに行くための場所ではなく、例えば誰でも昼寝がいつでもできるような、また若者にとってのグループホーム的な「たまり場」が必要。

(2) 地域における課題

- ・ 高齢、障害、子育て等分野別の「福祉」への疑問
→ 個別の分野の問題なのか？個別の分野で対応すれば解決できるか？
- ・ 地域には、世代、民族、家族の状況等がそれぞれ異なるいろいろな人が住んでいるという現実
→ 地域コミュニティの形骸化により新しい課題に対応できない。

(3) めざす地域像

- ・ 地域のさまざまな住民が相互に支え合う地域づくり
→ 「地域家族」という考え方
地域密着、小規模、多機能、双方向（サービスの提供者と受益者の関係）

(4) プロデュースの手法

- ・ 「地域家族」の関係を築くためには、まずお互いを知り合うきっかけが必要。そのきっかけづくりとして考えられるもの。
- ・ 普段の暮らし、生活の一部としての寝食を共にする交流を「合宿」という手法で行う。

〈 企画内容 〉

■テーマ

年齢、職業、国籍を超えて地域で暮らす人びとを、相互の助け合いでつなぐ
「地域家族」のプロデュース

■目的

今日、日本社会の効率化優先と均一化の進展の中で、地域コミュニティが希薄化し、少子化・管理教育の社会においては子どもたちが、高齢社会においては家族と断絶した高齢者が、また自国を離れて働く外国籍の人たちが、他にも子育てや看病など、生活上の支援を必要としている人たちがそれぞれ孤立している。

そこには、それぞれの地域の特性にあった住民相互の助け合いが不可欠である。私たちは、この住民の助け合いのネットワークを「地域家族」とよび、それぞれの地域にあった個性ある大家族が生まれることをめざし、そのプロデュースの観点から研究する。

この地域家族づくりが「ねとまり」の拠点から広がることを構想し、夕餉をともにし、語りつつ、床を並べることは、世代・国籍を超えた連帯感をつくり上げるものとする。こうした仮説に則り、可能であれば地域住民合宿の実践に取り組む。

2. 地域でのフィールドワーク（その1）

プロデュースの手法を試行するにあたり、現在、県内において「地域家族」の関係づくりといえる活動を展開しているグループ等を訪問し、地域の現状や問題点を学んだ。

（2）地域で芽生えている事例から学ぶ

（ソーシャルワーカー）

■南志賀在宅介護支援センター 扇田宗親さん

- ・「まちの相談屋さんがゆく」と題した話を聞く。
- ・福祉の問題は、生活の問題。高齢者も障害者も生活上で困っている人は、地域で支えていかなければならない。
- ・専門家だけではくらはしは守れない。住民の力で住みやすい地域づくりを。





■滋賀県健康福祉部健康福祉政策課 羽泉博史さん

・行政の取り組みを聞こうという趣旨で話を聞いた。
縦割り行政、縦割り福祉の問題

・小規模、多機能、双方向のたまり場の実例

◇彦根の「陽だまり」では介護保険ベースでないボランティアによる宅老所を運営しているが、高齢者だけで

なく地域在住の障害者も参加している。次第に障害をもつその人自身も痴呆老人の相手をするなど、活動の担い手になっていった。

◇近江八幡「すくすく」は、子育て支援としてのファミリーサポート事業を行っているが、近隣の独居老人があつまるサロンも行い、世代を超えた交流に。

・どんな活動から入っていきこうとも、多様な活動に結びついていく。

◇近江八幡「すくすく」では <こども>から<高齢者、商店街活性>へ

◇八日市「遊林会」では <環境>から<老人、障害者>へ

・地域づくりにおける滋賀県の特徴

地域活動の出発点を介護福祉に限っていないこと

・「みんなであったか地域ファミリーステーションづくり事業」の構想は、高齢者、子ども、障害者を含めた多様な人々が自然に集う身近な福祉サービスの場づくり。私たちの「地域家族」の発想と同じである。

・活動のひろがりの可能性・・・「六角ふれあい広場」の例

滋賀県社会福祉事業団も地域に活動主体をつくることに着目。2002年6月甲南町に「六角ふれあい広場」を開設した。現在NPO化しようという機運がもりあがっている。

ここは子どもと老人の交流の場であったが、近隣の精神障害者が顔を出すようになったことから、保健所と連携してこの人も受け入れるようになった。

・・・こうした地域の活動主体が生まれることで、民生委員とはちがった視点をもつアンテナが張り巡らされる。

・・・色々なきっかけから、多機能化の芽がうまれてくるという事例。

・グループへの羽泉氏のコメント

「ねとまり、合宿」「世代間交流」「多文化共生」を軸にした活動は、今日挙げた地域づくりの例に通じる。どこから入っていきこうと、発展すればNPO的な活動として地域住民がたすけあうものになる可能性は十分ある。協力してくれる自治会などもあるかもしれない。そうした成功例を生み出せば、他の地域にもひろがっていくのではないかな。

(地域での取り組み)

■滋賀県国際協会 常務理事 高田信男さん

- ・ 外国籍留学生は、中国人が多く、経済的に困難を抱えているが、県内にアルバイト先がないため、大変厳しい状況にある。
- ・ 労働者としてやってきた外国籍の人たちが、地域とのコミュニケーションがとれなくて、生活に支障を来している例が多くなってきた。
- ・ 外国籍労働者の子どもたちが母国語を話せないため、帰国したときの不安が募っている。
- ・ 外国籍労働者の家族を地域社会で支援するような取り組みが現れることを大いに期待している。



■NPO/ベジタブルロード 寺田孝明さん

- ・ ノーマライゼーション社会を目指す中で、障害者の働く場のないことが大きな問題となっている。
- ・ その働き場づくりの一環として、事業所型共同作業所「大中アグリ」の里」を開設された。なかなか難しい現実がある。



■近江八幡市国際交流協会

- ・タイの佐藤ナツカカーンさんを招いての国際理解サロンに参加。
- ・もち米で作った甘いお菓子。おいしかったそうです。



▲大林さん賞味

■NPO／一粒の会 代表 石井和浩さん

- ・旧八幡郵便局の解体問題を機に、その保存運動を通し、できるところからやる「まちづくり」へ発展した。
- ・市民がまちをつくったという近江八幡の伝統を残そうという活動である。
- ・ヴォーリスは建築ではなく人づくりを大切にする人であった。



■通学合宿 みくも塾

- ・歩いて集まれる中学校区で、合宿地から学校に通い日常生活を共有する。6泊7日の共同生活。
- ・高校生リーダーが中心となって活動を進めていき、PTAや住民ボランティア、BBS（更生援助活動団体）からのボランティアが協力する。
- ・塾の運営には、多様な地域団体の協力を得ること、またそのための調整や手続きに非常に労力を要する。
- ・甲西町の場合は、協力者となる元青年会議所役員、元PTA役員等、まちのキーマンが運営に多く参加していたためうまく進められていたが、他の地域で行う場合はこの点が重要であり、難しい点となる。
- ・ここで、在留外国人（ブラジル人）が地域から孤立しているとの課題解消のため、ブラジル人の子供たちと日本人の子供たちとの交流会を企画しているとの話を聞いた。

■NPO／日本ブラジルゆーあいネット 松井高さん

- ・97年から、夫婦で南米系住民の生活支援ボランティア活動を開始。
- ・現在メンバーは8名。
- ・主な活動は、ポルトガル語による生活情報紙「Info-amigo」の月次発行、子どもたちを対象とした日本語教室の開講、その他、行政に対するアドボカシー活動に取り組んでいる。
- ・90年の入管法改正により、日系南米人の就労が認められるようになったことで「ニューカマー」としての南米住民が増大したことは結構知られているが、その子どもである日系4世については20歳を超えると在留資格そのものがなくなり、日本で暮らすこともできない。この事実を鑑みれば、日本社会はこれらの家族が日本で暮らしていくことを想定していないことがわかる。それどころか逆に「出稼ぎで労働力のみ提供してほしい、でも日本に居続けられては困るのでそこそこで帰ってほしい…」という日本社会の本音がうかがえる。こうした本音が、子どもたちの教育や医療に関する問題など、生活の根幹に関わる事柄において、南米系住民に社会的な不利益となっている。この状況を何とかしたいという思いで、行政への政策提言に取り組んでいる。
- ・時には南米系住民の交流企画や草津市民への講演会を実施しているが、生活支援のための活動を中心に置いていると、イベント的な取組まではなかなか手が回らない。

■NPO／おうみはちまんすくすく 代表 伊藤幸枝さん

・近江八幡駅周辺の新しい住宅地で、母子密着による親のストレスや子どもへの虐待等に対する問題意識から取り組みを始める。

・子育てを支援するサポーターの養成からNPOとして近江八幡市のファミリーサポート事業を受託するところへ、計画的かつ戦略的に展開。



・ファミリーサポート事業では、援助会員（約150名）が市内にくまなく存在し、30分で依頼先に行ける状態である。依頼が1回ごとに完結することが結果がよく見えて（喜んでもらえる）わかりやすいため、そのことが継続の要因ともいえる。

・商店街の民家を改修して利用、事務所兼サロン（子育て広場や近所の人たちが集う世代間交流の場）として利用。

・子育て支援からスタートしたが、高齢者の介護保険対象外の家事支援のリクエストが出てきたり、高齢者のたまり場になったり、不登校の子どもが遊びに来るようになったり、学校帰りの子どもが立ち寄るようになったり、利用者の年齢層は0～90歳である。「まちの縁側」をめざしている。



■NPO／ぼぼハウス 子育て支援部 代表 福井久美子さん

- ・介護保険フォーラムに参加した市民が核になって活動開始
- ・誰もが住みやすいまちづくりをめざし、障害、子育てにまたがる活動へ展開
- ・地域の公園を会場としたキャラバン隊により、参加者同士が知り合い、地域とのつながりをつくるきっかけづくりにもつながっている。

■多文化共生を考える集い～基調講演「多文化共生と人権」～
すべての外国人労働者とその家族の人権を守る関西ネットワーク
代表 丹羽雅雄弁護士

- ・日本人には「単一」「排除」の意識が根深い。その「排除の論理」が旧植民地出身者の日本国籍を一方向的に奪った。そのことが今日の国籍問題の根っこにある。
- ・外国籍住民の地方参政権は、地域で日本人と同じように暮らす住民として、当然の権利である。



- ・移民を排除しつつ外国籍労働者を受け入れたいとする矛盾した日本の労働者政策に、外国籍労働者が翻弄され不利益な状況となっている。

(2) フィールドワークから見えてきたこと

「住民主体の交流」

- ・小規模、多機能、双方向の関係
- ・地域家族のネットワークとしてのきっかけづくりと、きっかけから発展的なものが生まれている現状。

「まちづくり」

- ・自分たちの手でできることをしようとする姿勢
- ・住みやすいまちをめざしての地域との関わり
- ・多様な地域団体の協力

「地域住民としての外国人」

- ・欧米崇拜の意識からくる非欧米人への偏見
- ・「よそ者」としての外国人、「地域住民」という観点の欠如
- ・地域の暮らしの中での国際化 → 内なる国際化、真の国際化

3. 取組テーマの再構築

県内における地域のつながりづくりに関する活動を展開するグループ等を訪問し、小規模、多機能、双方向の関係を主体的に築くための切り口が多様であることを認識した。

次の段階として、企画内容を具体化するためにテーマを絞り込む必要がある。私たちがフィールドワークを終え、地域住民のつながりを考えるにあたって身近で重大な課題だと考えたのは、外国籍住民とのつながりであった。私たちは、外国籍住民を「地域住民」として捉えていただろうか。そのような観点から、手法の具体化に向けてテーマを再構築した。

(1) テーマの絞り込み

- ・地域家族は地球家族。地球上のいろいろな人で地域がつけられている。そのためにはまず、「ご近所の外国人」と関わりあえる地域をつくっていく必要があるのではないだろうか？
- ・地域家族の中に外国人も生活しているという現実の再認識

(2) 手法の具体化のための企画

- ・11月30日（大津まちづくり百町館）
いろいろな国籍の人を招いての交流会実施
- ・12月（八日市市）
「餅つき」を通じた地域交流会の試み
- ・1月（甲西町）
「太鼓」「音楽」を通じた地域交流の試み

(3) 企画後の動向

- ・企画を実行するために準備を進めようとしたが、いざ地域の中へ入ろうというとき、私たちが外国籍住民を取り巻く現状についてあまりにも知らなかった。
- ・同様の企画は既に各地で実践されていること、また、単発のイベントを実施することが本来の研究目的ではないという振り返りを行った。

これらのことから、企画の実践は行わず、より課題の本質に迫ることや何を行動すべきかについて考えるため、県内において多国籍住民と地域との関係づくり実績のあるところでフィールドワークを行うことに軌道修正した。

- 外国籍住民と地域住民とのつながりづくりのサポート … 愛知川町
- 外国籍住民の生活用品、生活情報のサポート … 大津市
- 外国籍住民の母国語教育のサポート … 甲西町

4. 地域でのフィールドワーク（その2）

外国籍住民の多い地域で、外国籍住民と地域との関係づくりに実績のある人、外国人の日常生活を支える人やその現状を知る人を訪ね、「ご近所の外国人」と関わり合える地域づくりについて考えをうかがった。

（1）愛知川町（株）協栄 代表取締役 青木久数さんのお話



（▲写真左端が青木さん）

- ・外国人（ブラジル）の雇用は、平成2年くらいから。バブルの頃で人手不足の状況となり、日本全体で日系の出稼ぎ労働者が増加していた頃。当初は派遣会社を通じて雇っていたが、人材派遣はトラブルの発生も多く、派遣社員を預かるという形で平成4年から直接雇用に切り替えた。自宅近くにあった空家3軒を借りることができ、生活面のフォローができたことや、彼らの手取額が増えるというメリットもあって実現できた。
- ・日本では工場の職員だが、ブラジルにいたときは学校の教員や警察官だったという人もいるため、慣れない作業に就いていて指示の伝わり方が充分でなく、日本人の職員ともめることが多い。最初の頃は、比較的、ブラジル人の生活や考え方を理解してくれる職員と組めるように配慮するなどの対応が必要だった。
- ・彼らが就業した当初は、ほとんど言葉が通じず、私もポルトガル語を理解しようと辞書を買って求めたが、当時はどこを探しても辞書が売ってなくて、和歌山の書店まで問い合わせをして手に入れた。こちらが歩み寄る姿勢を見せたことが、結果的に彼らの日本語習得の意欲を増すことにつながった。
- ・「生活交換」と称して、自分の家族と彼らの家族が互いの家に招き合って食事等を共にし、お互いの生活を知る機会をつくった。
- ・彼らには日本人が大切にする協調性をわかってほしかったので、住民に出会ったら必ずあいさつをすること、地域住民の一員としての地域活動（溝掃除や運動会）

には日本人と同じように参加することを実行してもらった。その結果、地元の人とのコミュニケーションをとりやすくなった。

- ・言葉、食事、生活習慣、宗教等において、こちらのやり方を一方的に押し付けてしまって反論を受けることがあったが、何度か繰り返す中で、相手の言い分を受け止め、違いを理解する必要があることを知り、自然と配慮するようになった。ある時、といだ米を流すときにどうしても米粒が流れるが、排水に流してはいけないと注意したところ、日本人は野菜など流したり、食べ残しを平気で捨てると反論された。日本人故に、特に米には特別の感情を持っているのだと気づかされた。また、クリスマスの過ごし方にも大きな違いがあり、彼らにとっては、クリスマスイブからクリスマスにかけては日本とは全く違う意味で宗教的に大切な日で、イブに招かれたが、たくさんの料理を前にいつまでも手を着けない。午前0時を過ぎてからお祝いをして食べるもので、それまでは誰も食べないということだった。その日は一晩中騒ぐため翌日はほとんど会社を休む。彼らにしてみれば、クリスマスは休む日であるが、正月やゴールデンウィークはなぜ長期間休むのか理解できないらしい。こういったことから、互いに生活や文化の違いを理解しなければいけないということがわかった。
- ・在留の更新は1年更新と3年更新があり、長く滞在している人は更新を重ねている。また、永住権を取った人もいる。
- ・子どもは、個々人によって適応力が違うようで、仲良くとけ込んでいく子もあれば、全くなじめなくて登校しない子もいるようだ。不登校の子たちが溜まる場所があるが、ブラジル人より日本人の子も多く訪れている。
- ・交流会やサッカー大会は、企業・行政・警察の協調により、早くから発足した「国際交流連絡協議会」が行っており、これもネットワークづくりには有効だが、まず日常生活で一緒に行動する、作業を共にすることが大切だ。

(2) 愛知川町大字中宿 木下良夫さんのお話



- ・中国残留孤児のとなった見ず知らずの日本人を育ててくれた中国の人への恩返しのつもりで、町内の企業が受け入れている海外の研修生（中国人）を町の行事に案内したり世話を焼いている。
- ・もともと個人的に世話好きなこともあり、区長や

青少年の健全育成に関する役員などを引き受けた時にはいろいろと動けるが、そういう立場でないと動きにくい。

- ・ブラジルやフィリピン国籍の住民もいるが、自治会費をもらうことについては、話し合うことになっている。また、川掃除はアパート等のオーナーから不参料を

もらって免除することになっている。

- ・外国人だけでなく、アパートやマンションが続々とできて人口の流入が激しいので、旧来の自治のしくみから新しいしくみを考えることもできず、例えば「地域で子どもを守る」ということが全くできていない。

(3) ブラジル食料品店フェリシダーテ（大津市一里山）の調査結果

- ・生活のニーズを満たすための情報ネットワークが成立している。（食品・雑貨等商品、ブラジルの新聞、ブラジルドラマのビデオ、中古車・パソコン・フィットネス等のポルトガル情報誌、不動産、ブラジル人の理髪店、保育）

- ・ビジネススペースにおいて日本人事業者との連携が成立して

いる。（フェリシダーテも日本人が経営している。ブラジル人従業員もいるハーバー不動産。行政書士。派遣業者が行うサービス。）

- ・当事者の意識は、現時点では出稼ぎのための一時滞在という意識が多数派のようで、日本人コミュニティとの交流はほとんどないが、それ以前にブラジル人同士での交流の場もほとんどない。職場やブラジル人の集まりで出会う範囲で交流に限られ、ブラジル人当事者団体という性格の組織も成立していない。

▼店の入口



▼お話をうかがった店員さん（左）



▼商品（お菓子類が豊富）



(4)「滋賀ラテン学園」に詳しい古谷昌代さん(甲西町役場人権教育課)のお話

- ・日本人が経営する派遣会社の支援により設立(託児施設→学校)されたブラジル人学校。派遣会社が所有。校舎は2月に甲西町から竜王町へ移転。
- ・特殊学校ではないので助成がない。
- ・ブラジル人学校協会の働きかけにより、来年度から大学の受験資格が認められる。
- ・近隣小学校との交流はなく、地域活動に呼んでももらえない。(地域活動へは、行きたい人も行きたくない人もいる。日本人と同じ)
- ・現在は当事者団体は少ないが、数年すれば日本語力の向上や支援する団体等もできて、当事者で要求をしていくようになるのではないかと。

竜王町に移転した「滋賀ラテン学園」の様子(現地取材)

▼外観(入口)



- ・甲西近江八幡線沿いの漬物工場跡地がラテン学園。
- ・見学もできる工場施設のため駐車場が広く、スクールバスが数台駐車してある。
- ・入り口を入ると小さなロビーがあり、ベンチ、自動販売機が置かれ休憩ができる。ここで話をし、情報交換の場となっている様子。

- ・一階は数店の店舗が入っており、食品売り場を除いて各ブースに扉がある。
- ・パン屋(ブラジルの製法で作られており日本のものとは少し違った食感である。)、レストラン、食品店があり、加工食品始め、日用雑貨、生鮮食品(野菜)、食肉などが販売されている。食肉の加工は現地で行っており、食品売り場の奥に加工場がある。また、洋品店、美容院等もある。
- ・CD売り場はもともとの冷蔵庫で、重い鉄の扉が常に開かれた状態。CDとビデオが並べられている。イメージとしてはホテルなどのショッピングコーナー。
- ・夜になっても多くの人でにぎわう。仕事を終えた人が集うようだ。
- ・いたるところで話をする人の輪ができています。情報交換でもしているように見える。
- ・日本語を話す子どもたちとポルトガル語を話す大人が入り乱れている。
- ・そこで働く人たちは日本語を覚えようと努力しているよう。
- ・積極的に話しかけてくれる。
- ・まるでミニブラジル。



▲食品店店内奥の食肉加工場

(5) フィールドワークから見えてきたこと

「過去と現在を知る」

- ・「外国籍住民」といっても、国籍、日常生活での地域とのかかわりの度合い等、その実情はさまざまである。
- ・外国人についての制度的な不利益は、オールドカマー問題に起源をもっている。外国人を視野に入れたまちづくりに取り組むならば、歴史問題および社会政策上の課題から目をそらすことはできない。(労働力確保、外国籍住民の参政権の問題)
- ・フィールドワークを経て、一般的な課題認識であったものが大きく変わった。現状の課題がいかに多様であるか、いかに個別の課題であるかを、また、知ることの大切さを再認識した。
- ・個別課題の当事者として関わっている人を除いて、最も日本の現状を知らないのは日本人で、最も地域のことを知らないのは地域の人である。個別に向き合わない実情は見えない。

「当事者」

- ・非定着志向が大勢である中、ブラジル人が当事者性をもつ活動団体の形成は難しいが、その中にもあっても滋賀県での活動事例も生まれている。
(ブラジルへ帰国することを前提に日本においてもポルトガル語教育に取り組む当事者団体もあれば、日本の中で定住しつつ民族アイデンティティを守りたいという在日コリアンのコミュニティもある。また、それぞれの活動における当事者の志向は様々であり、日本人コミュニティとの交流への関心度も異なる。)
- ・アメリカ人と在日コリアン、ブラジル人の生活状況の違い、留学生なのか就労目的かといったように立場による違い、日本への定住志向なのかそうでないのかによる違い等、当事者のありようは異なる。
- ・「課題」の発見と、それを「何とかしたいという思い」によって「当事者」になる。

「必要なつながり」

- ・国際交流協会が主導するネットワークや多文化共生を唱える NPO なども含め、ブラジル人への生活支援活動、エンパワーメントも進んでいる。
- ・生活ニーズを基盤にしたブラジル日系人のネットワークは生まれてきており、それ自身は生活の必要から生まれたコミュニティとしての内容をもっている。
- ・現時点では、いずれ帰国するという外国籍住民者が多く、地域に定着する志向をもったコミュニティにまでいたっていない。(背景には制度的に出稼ぎ状況に誘導している日本社会の問題がある。)
- ・暮らしや命に関わる緊急事態や非常事態への対応、またその発生防止のために、日常のコミュニケーションを必要だと感じているのは、住民であれば国籍に関係なく同じだが、必要だというだけでは義務感や負担感が強まるだけで、かえって良い関係を築きにくくなる。
- ・活動等に参加したくない人の心を動かし、共に行動するための動機付けはあったほうが良いが、今ある生活の中での共通の課題や共通の行動の中から見出すこともできるのではないか。
(例えば、子どもを取り巻く状況や言葉の問題は多くの人に共通する課題)

5. まとめ ～「ご近所の外国人」と関わりあえる地域づくりにむけて～

当グループのテーマ＝「ご近所の外国人と関わりあえる地域づくり」を考える過程で、当初はどんな人でも普遍的に参加できるというユニバーサルな観点からのイベント企画を検討していた。イベントそのものはどんなものでも人の交流を生み出す以上、交流をつくる手法の一つではあるが、「誰でもごちゃ混ぜに」「ユニバーサルに参加できる」という観念に重きを置くとかえって内容が希薄になる。

多くのフィールドワークの結果知り得た“外国人を取り巻く状況やその当事者が認識する課題”は実に多様であるという現実には照らすと、最大公約数の課題のみを扱うイベントは、当事者にとって関心がないものになってしまう可能性が大きい。

多様な人々と共生するという課題には、関わるチャンネルも多様化する必要がある、ご近所として関わるチャンネルは、地域生活の中に既に遍在している。日常の生活を共有することこそイベント型の取り組みより本源的である。

私たちが「地域家族」をプロデュースするという本研究を通じて見出したものは、現在各自が関わっている市民活動、学校、仕事、地域生活において、共生しようとする多様な主体の中に「ご近所の外国人」という認識を持つこと、視野に入れるということである。既に私たちは、誰でも何らかのチャンネルを持っているのである。どの人にとっても自分の地域の自治会、学校機関、取り組んでいる NPO 活動において実践テーマが見出せるはずだ。

また、今立っているところからの実践がすぐには困難でも、外国籍住民自身が外国籍住民の生活課題を支援する当事者団体のサポートをすることで、そういった現状を多くの人に知らせることからでも、実践テーマは見出せる。

本研究でさまざまな課題を発見することができたが、これをそれぞれの生活の中のチャンネルにおいて意識して行動していくことが、私たちの次の一歩である。

湖国の人たち

オピニオン '04

ブラジルの子の勉学環境向上へ

日本の行政の財政支援を

3年前に設立され、就労目的で来日した日系ブラジル人の子弟らに通う「滋賀ラテン学園」(童王町山之上)。文部科学省は先月、来年度から条件付きで全国19校のブラジル人学校の卒業生に大学入学資格を認めることを決めたが、そのうちの1校に含まれていた。同学園のアレシャンドレ・セスタク・ハチステラ校長(28)守山市古高町IIに、学校運営や在日ブラジル人の教育の課題、問題を聞いた。

文科省の認定を受け、とてもうれしい。学園は昨年4月、ブラジルの政府の公認を受けており、今回の認定にはブラ

私たちが学校でも教育の意義がようやく認めら

滋賀ラテン学園校長 アレシャンドレさん(28)＝守山市



アレシャンドレさん(中央)と教室で授業を受けるブラジル人の子どもたち。童王町の滋賀ラテン学園で

シル政府の働きかけもあり、残念ながら、現時点では高校生が少なく、それほど多くはないでしょう。児童・生徒は200人ですが、保育部部門が60人、小中学校部門(8年)が130人で、高校2年2月に労働者を受け入

授業は午前9時10分から午後3時20分まで。全国の教員免許を持つブラジル人16人と、日本語指導などを担当する日本人2人がいます。生徒はすべてバスなどで送迎し、甲賀郡や八日市、大津、草津、長浜などのほか、三重県上野市からも通学している。授業料は全学年共通で、月額3万3000円です。

学校運営には苦労も多いとか。やはり金銭面での不安が最も大きい。日本、ブラジル両政府からの財政支援はゼロで、生徒の授業料だけが頼り。図書室の充実などやりたいことはたくさんあるが、手が回らせない。

部で1年程度の補習が必要となる。普段の授業はすべてポルトガル語なので、今後は日本の大学への入学希望者のために、日本語での受験指導にも力を入れたい。どのくらいの子が大学進学を希望するのでしょうか。

多くが中学卒業とともに親と工場などに働きに出ている派遣会社の支援でスタートしました。当初は託児施設だけだった。5歳の長女が小学校入学を控えており、ポルトガル語で勉強できる学校に通わせたいとの思いから、学校整備に力を注ぎました。現在は派遣会社の支援は受けず、独立経営になっています。

提言

大学入学資格の認定は、ブラジル人学校の社会的な地位向上にとって大きな前進。しかし、経済的な理由など

高校はおろか、小中学校にも通っていない子どももいる。日本の行政は子どもたちが安心して勉強できるように積極的な支援をしてほしい。

あれしゃんどれ・セスタク、はちすてら 75年、ブラジル南部のパラナ州生まれ。日系3世の妻と結婚し、7年前に来日。工場勤務を経て、01年2月の学園設立と同時に校長に就任。妻と長女、長男の4人家族。

■グループ活動の経過

(月 日)	(内 容)	(場 所)
2003年		
4月7日(月)	グループ分けに向けた福祉グループミーティング	草津まちづくりセンター
4月23日(水)	グループ分けに向けた福祉グループミーティング	野洲町内
4月29日(火・祝)	4期生塾生全体会議でグループ分け決定	淡海ネットワークセンター
4月25日(金)	滋賀県国際協会訪問	大津市(ピアザ淡海内)
5月19日(月)	滋賀県健康福祉部健康福祉政策課羽泉氏のお話を聴く	草津市内
5月29日(木)	企画書仕上げ	草津まちづくりセンター
6月13日(金)	南志賀在宅介護支援センター扇田宗親氏のお話を聴く	草津まちづくりセンター
6月14日(土)	びわこベジタブルロード寺田孝明氏および農場の訪問	安土町
6月14日(土)	近江八幡市国際交流協会第17回国際理解サロン(タイ編)参加	近江八幡市
6月28日(土)	NPO法人一粒の会訪問	近江八幡市
7月7日(月)	通学合宿みくも塾(事業実施中に訪問)	甲西町
7月14日(月)	今後の活動についてグループミーティング	草津まちづくりセンター
7月29日(火)	フィールドワーク先についてグループミーティング	淡海ネットワークセンター
7月30日(水)	日本ブラジルゆーあいネット 松井高さんのお話を聴く	
8月9日(土)	NPO法人おうみはちまんすくすく訪問	近江八幡市
8月23日(土)	ぼぼハウス活動訪問	彦根市
9月28日(日)	4期生塾生会	淡海ネットワークセンター
10月18日(土)	中間発表に向けたグループミーティング	草津まちづくりセンター
10月26日(日)	4期生グループ研究 中間発表	淡海ネットワークセンター
11月8日(日)	「多文化共生を考えるつどい」に参加	草津コミュニティー支援センター
2004年		
1月12日(月)	中間発表後の活動の展開についてグループミーティング	草津まちづくりセンター
1月31日(土)	活動の展開についてグループミーティング	草津まちづくりセンター
1月22日(木)	榎協栄 青木久数氏、中宿 木下良夫氏のお話を聴く	愛知川町
1月27日(火)	ブラジル食料品店フェリシダーテ訪問	大津市一里山
2月9日(月)	滋賀ラテン学園に詳しい甲西町人権教育課古谷昌代氏のお話を聴く	甲西町
2月29日(日)	成果発表会に向けたグループミーティング	草津まちづくりセンター 大津市一里山



e-食

おうみ未来塾4期生

滋賀の地酒と文化

洞ヶ瀬 義 重

馬 淵 英 幸

尾 本 良 子

初 田 幸 穂

◆具体的な研究テーマが決まるまで

テーマは決まったものの、「食」という漠然とした大きいテーマの中で模索が続く。動いてテーマを見つけようということで活動を開始。

◇活動記録

4月 9日 第1回定例会 草津：こばや雑穀堂

「e-食ネット」メンバー初顔合わせ よく飲みました

4月23日 第2回定例会 草津：食を通しての活動をおこなうことで意見が一致

4月27日 第1回フィールドワーク能登川町ベジタブルロード野田さんと面談



消費者と生産者とのコラボレーションの可能性を検討した

会議終了後、反省会を近江八幡「たねや」で甘いもの会議を開催。

4月29日 4期生塾生会 グループ分け 企画案の提出

5月14日 第3回定例会 近江八幡瓢箪亭 「瓢箪鍋」を食す

5月21日 第4回定例会 草津：草津公民館

5月24日 第5回定例会 「e-食ネット」を「e-食」として新体制で活動開始



5月28日 第6回定例会 企画案検討 大津：ネットワークセンター

6月 7日 5期生入塾式 「酒」をテーマにグループ研究決定

6月11日 第7回定例会 欠席者を含め、共通のテーマとして決定

7月 2日 第8回定例会 草津：草津公民館

7月29日 第9回定例会 草津：まちづくりセンター

8月 3日 第2回フィールドワーク 南彦根さわ酒店

「旭日」藤居本家訪問

9月 2日 第10回定例会 草津：まちづくりセンター 幡さんと「酒談義」



なぜ「日本酒」なのか？滋賀の地酒なのか？

*日本酒の歴史は、遠くは弥生時代にまで遡る。

地酒は地域に育まれた文化そのものであり、食と密接な関係がある。

滋賀は各地域に蔵元があるが、年々減少の傾向にある。

地域資源、地域の財産としての「地酒」、その地酒を通して近江の文化を発信し、後世に伝えていきたい。

9月 9日 第11回定例会 草津：草津公民館 研究テーマについて

◇近江の地酒と近江文化

- ・琵琶湖というロケーション
- ・自然の恵み（水・米・緑・空気・気候など）
- ・地元に対する思い、地域性、足下のすばらしいものの発見
- ・酒蔵訪問（酒への思い入れ、こだわり、地域とのつながり）

●日本酒の歴史：

- ・杜氏の歌
- ・酒造りの研究
- ・発酵文化
- ・酒と肴

9月23日 第3回フィールドワーク 木之本 富田酒造訪問 鯖素麵を食す

●地酒の持つ地域文化を探索

- ・伝統食・発酵文化の探索（特産品の企画）
- ・酒縁・酒楽（体験型イベントの開催）
- ・地酒紹介のパイロットショップの設立
- ・地酒スタンプラリーの開催

9月27日 第4回フィールドワーク 秋の利き酒会 大津プリンスホテル

9月28日 4期生塾生会

●地酒が抱えている問題の探索と流通の変化

- ・ 酒店訪問（さわ酒店、タイナカ酒店）
- ・ 問屋訪問（滋賀酒販イベント参加・聞き取り調査）
- ・ 蔵元訪問（旭日・藤居本家、七本槍・富田酒造）

10月 4日 第5回フィールドワーク マキノ吉田酒造訪問「栄とこ」弁当を食す

10月26日 4期生中間発表会 ピアザ淡海2階

11月2～3日 地域文化祭にて地酒に関するアンケート（蔵元6社協賛）実施

●生活者アンケート（11月2日イベント）

（協賛蔵元）

萩の露（株式会社福井弥平商店）

御代栄（北島酒造株式会社）

七本槍（富田酒造有限公司）

竹生嶋（吉田酒造有限公司）

松乃花（川島酒造株式会社）

神 開（藤本酒造株式会社）

11月29日 第12回定例会 野洲コーポ会議室

●酒と肴：

酒に合う湖国料理：地酒にはその地域の生活文化が根ざしている

酒と生活行事：新年の料理とお屠蘇

郷土料理：地酒は風土と風俗の産物、故に地元の惣采などと深く結びつく

地産地消：地酒と醸造用米

12月 9日 滋賀酒販聞き取り調査

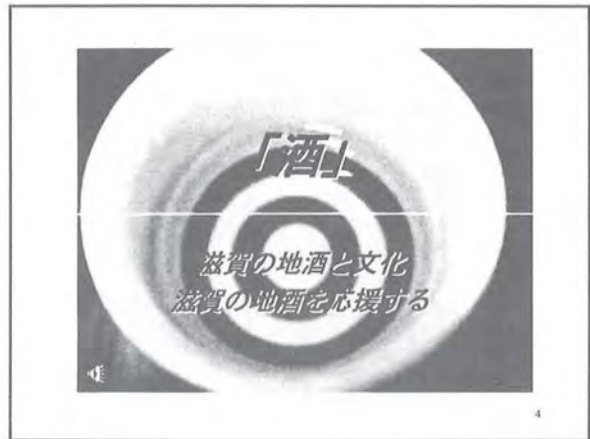
2004年

1月17日 第6回フィールドワーク 近江高島「萩の露」

4期生合宿「利き酒と滋賀の料理」の実演実施 牡丹鍋を食す



2月29日 第13回定例会 おうみネットワークセンター



- 「e-食」研究コンセプト**
1. 1年間楽しんで研究できるテーマ
 2. 個人的にも好きなテーマ
 3. メンバーが共通して取り組めるテーマ



「富田酒造訪問」

●FW-3 (馬淵特派員)

第3回フィールドワーク 木之本「富田酒造」訪問



7

「滋賀酒販の取り組み」

1-日本酒の消費動向

昭和50年をピークに減少傾向

2-消費支出金額

ビール(41%) 酒(15%) 焼酎(11%) ワイン(6%)

3-日本酒の変遷

戦後：生産量の増大（粗悪酒の増加）この時に既に酒類間シェアの変化に着目する者はいなかった。

昭和50年：日本酒ピークを迎える

地酒の台頭：清酒の級別制度の廃止

吟醸酒ブーム：全国新酒監評会にて金賞受賞が行われとなる

増量パック競争：価格競争と安い酒

10

「秋のきき酒会」

●FW-4 (洞ヶ瀬特派員)

第4回フィールドワーク 滋賀酒販主催 大津プリンスホテル



11

「滋賀酒販の取り組み」

1-滋賀県内酒を飲める店、購入できる店の整備

2-蔵元と消費者の意思疎通の促進

3-県内酒の振興を目的としたイベントの開催

「吉田酒造訪問」

●FW-5 第5回フィールドワーク マキノ 「竹生嶋」吉田酒造訪問



地産地消

契約田で酒米を栽培してもらい

その米で酒造

銘柄：山田錦 銀ふぶき



「福井弥平商店訪問」

●FW-6 (洞ヶ瀬特派員)

第6回フィールドワーク 近江高島「福井弥平商店」訪問



12

「FWで学んだこと」

- 酒販店：酒は生き物。品質を少しでも保つために工夫している。美味しい酒を自分で探し求めている。
- 蔵元：「地酒」はやはり地元産米で酒造。滋賀県民よりも滋賀移民のほうが地酒に詳しい。

酒は発酵食品。

日本料理の調理人がもっと日本酒のことを知るべき。

特長のあるのが地酒。

13

「地域文化祭」

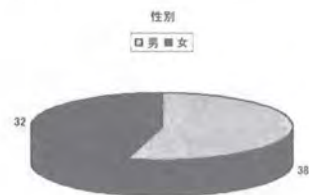
- FW-6 (e-食) フィールドワーク 真野北学区地域文化祭
滋賀県の地酒についてのアンケートを取る。



14

「地域文化祭2」

◇利き酒会参加者の性別



17

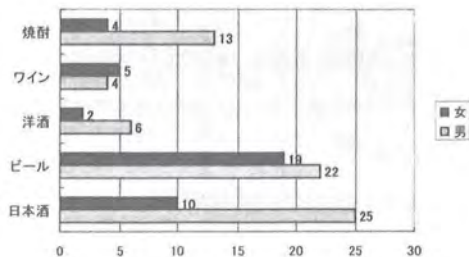
「仮説」

- 1-地酒は滋賀移民によって発掘されている
旭日の藤居本家当主との会話から
- 2-日本酒の飲酒率が下がっている
果たして日本酒は何位なのか?
- 3-滋賀の地酒は余り知られていない
何人の滋賀移民が知っているのか?
- 4-蔵元によって味の違いがある?
一般人でもわかるのか?

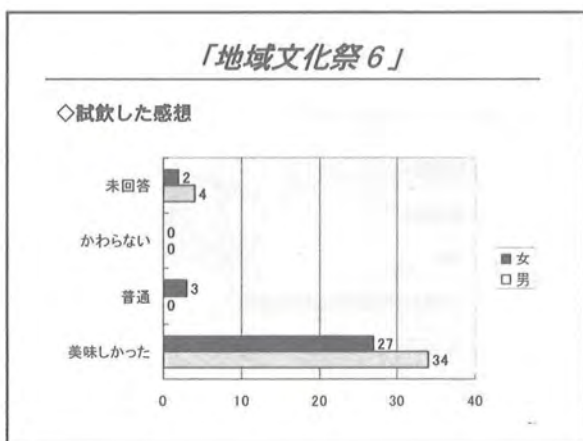
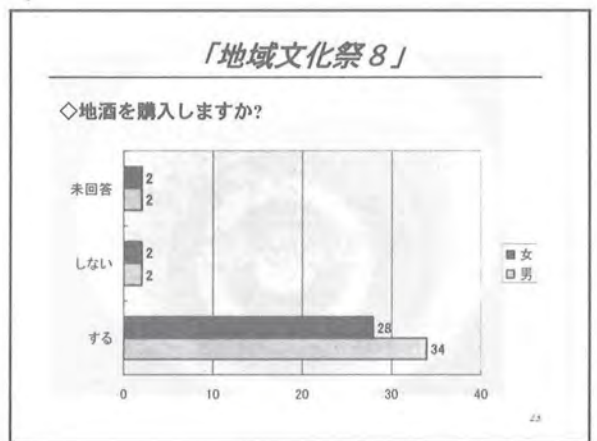
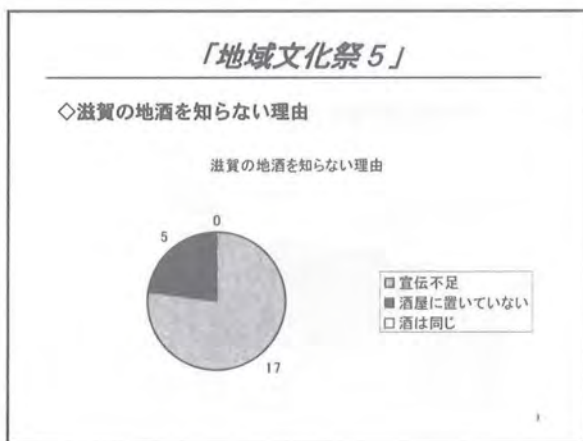
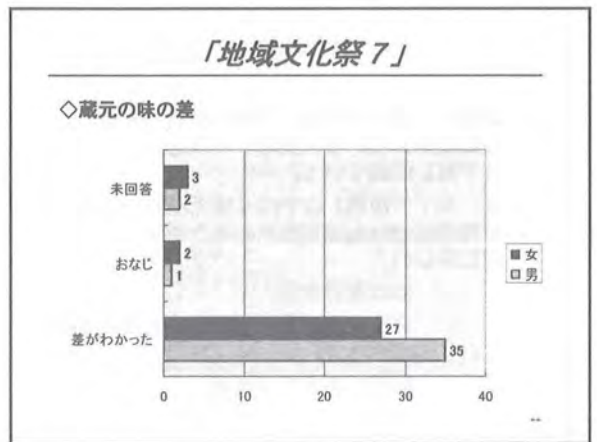
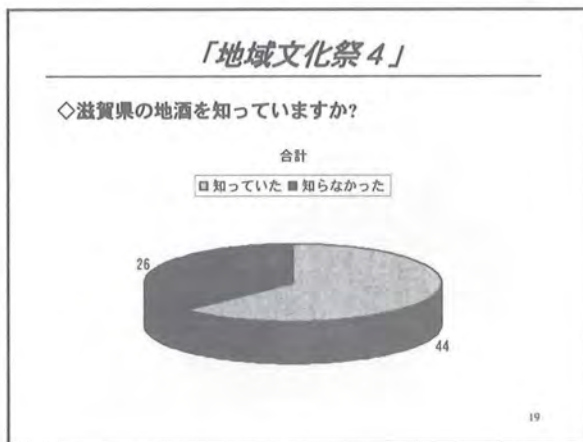
15

「地域文化祭3」

◇普段飲む酒の種類 (重複回答)



18



- ### 「地域文化祭9」
- ◇地酒についてわかったこと
- 1-飲酒人口はビール 日本酒 焼酎 洋酒 ワインの順
 - 2-滋賀の地酒については63%の人が知っていた
 - 3-知らない理由は宣伝不足、酒販店への配荷不足
 - 4-89%の人が美味しいという感想
 - 5-蔵によって味の違いがわかる
 - 6-89%の人が購入するという回答
- 24



25

1-酒と地域の関わり

●酒と地域の人々の暮らし

・酒の役割

- 1-おせち料理とお屠蘇
 - 2-結婚式、葬式、祭りには欠かせない酒
 - 3-人と人との潤滑油としての酒
 - 4-湖北地方の神事（おこない）：五穀豊穡と平安の祈願
- *「頭」：神を迎えるのも酒、直会（なおらい）も酒のように生活に密着している。

28

「地酒」と「地域文化」



26

湖国の味



にしん昆布巻



大根煮

29

研究テーマ案

1. 酒と地域の関わり
2. 酒と肴・おうみの特産品を企画する
3. 地酒を応援する
スタンプラリーの開催

27

2-おうみの特産品を企画する

正月は唯一日本の風習と習慣が残るものとして受け継がれている。昔の神饌に始まり、それを受けた正月のお屠蘇と肴に代表される。

神饌には生饌（丸物神饌）と熟饌（調理済み神饌）が有る。熟饌の代表としての餅（蒸す）と熟脂（発酵）は湖国を代表する神饌として受け継がれている。

●神饌：神事で供える飲食物の総称

◇餅ずし

春に収穫の餅を塩漬けし、飯をつめ時間をかけて発酵させる本熟脂のこと。

30

鮎鮓 (ふなずし)



31

「地酒を応援する」

3-どのように応援するのか?

地酒と料理の会を開催する

県外に出張する際はこだわりの地酒を持参

地酒スタンプラリーの開催

34

「飯漬け」

◇湖国の特産品を発見する

熟鮓で有名な鮎ずしの「飯」を使って漬物を企画した。

◇仮称：「飯漬け」*4期生進さんとともに作成

「飯」の乳酸菌を漬物に応用する。

レシピ：飯(うおい製)・醤油・砂糖・香辛料

漬材料：大根・人参・牛蒡など

漬期間：1週間～2週間

*「てんしょく」に紹介

32

「酒の肴」



高瀬特派員お勤めの「鯖煮鮓」

35

「地酒を応援する」

1-滋賀の地酒の現状

2-なぜ応援をするのか?

地酒を味わうことで地方の文化に触れることができる

地酒を愛飲することはおうみ文化の継承

33

「地酒スタンプラリー」

1-地域の蔵元との協力

2-蔵元の地域に於ける歴史の発掘

3-地元の文化財などをあわせて紹介

消費者と蔵元と地域の文化的な交流

36

「おうみの地酒の試飲」

◇おうみの地酒

1-竹生嶋 辛口純米

2-萩の露 あらばしり(純米)

3-七本槍 純米吟醸

4-藤居本家 大吟醸 琵琶の舞

◇漬物とともに味わってください。

終

37

研究テーマー 1 酒と地域の関わり



(1) 酒と地域の人々の暮らし

日本人は、お正月にはおせち料理とともにお屠蘇をいただき、一年間の無病息災を祈るという風習があります。結婚式や葬式、祭りには欠かせないのがお酒で、人と人のコミュニケーションの潤滑油となる大切な存在が{酒}です。

また、滋賀県の湖北地方には今もうけ継がれている神事{おこない}があります。おこないとは、年の初めに村の五穀豊穰と村の平安を祈り、神事としておこなわれるもので、{頭}(とう)と呼ばれる神を迎えるのも酒、直会(なおらい)も酒、次の行事に移るとともに酒、余興の酒と、酒に始まり酒に終わるという行事です。呑むほどに、酔うほどに芸も飛び出し、自分をさらけ出すというものです。神と人、長老と若衆、伝統と格式、村の絆を保ってきたのが湖北のおこないであり、{酒}であります。

(2) 滋賀の地酒と酒の肴

酒はその土地の風土と風俗の産物であるから、地酒の味わいは地元の惣菜と深く結びついています。

つくってみよう滋賀の味から2品目地酒に合うものを作ってみました。

にしん昆布巻き



昆布とにしんは、京都の貴族に人気があり、古くから敦賀を経て琵琶湖の上を船で運びました。近江商人の重要な取扱商品にこんぶとにしんがあり、人々の喜びごとにはかせない料理でした。

大根煮



色々な年中行事や祭事食に用いられもので、{おこない}の神事を終えた後で、座を囲む食事に欠かせないのが大根とするめ煮でした。

どちらもあっさりとした味わいのため、酒も香りがあまり強くなく、のど越しのすっきりしたお酒が合うように思われます。

(3) 酒を通じた地域のコミュニティの形成

昔、人々は地域で共同し、結婚式、葬式、祭りをおこなってきました。

村の人との協力がないとそれらの行事がこなせず、何日も続く共同作業の中で、自然と食をともにし、旬のものを食べながら近況を語り合い、自然な形でたすけあいが生まれていました。

しかし今は冠婚葬祭の業者により、手間はかからなくなったものの、そのような場がなくなりました。

健康でいたい、食事は安全なものを楽しく食べたい、地域で共感したり、感動できる仲間がほしいという課題を解決するひとつの手段として、酒と酒の肴で食縁の再生をおこないます。

食をともに楽しみ、それが地域のコミュニティをつなぐ、人と人が出会う場、情報交換の場づくりを地域の人たちといっしょに創っていき、その協同の場であたらしい形のコミュニティを形成していきます。

テーマー 2 特産品を企画する



正月は唯一日本の風習と習慣が色濃く残るものとして受け継がれている。昔の神饌に始まり、それを受けた正月のお屠蘇と肴に代表される。

神饌には生饌（丸物神饌）と熟饌（調理済み神饌）がある。

熟饌の代表としての餅（蒸す）と鮎鮓（発酵）は湖国を代表する神饌として継承されている。

* 神饌：神祇で供える飲食物の総称



* 鮎鮓は伝統的な神饌の代表

地酒は文字通り郷土を代表する酒であり、その土地の伝統料理との関係は深い。

吉田酒造の「竹生嶋」の懐の深い味わいは、鴨鍋や鮎鮓に相性が良い。

富田酒造「七本槍」推薦の蔵元でしか飲めない高泡の「かす汁」。

福井弥平商店「萩の露」と粕漬けの漬物。

など、県下、県外に広める特産品としての要素は十分に満たしている。

◇湖国の特産品を企画する

「飯漬け」と命名。4期生 進 紀年さん協力

熟鮎で有名な鮎鮎、その鮎鮎の「飯」を使って漬物を提案する。

●レシピ

「飯」のもつ乳酸菌の発酵を利用して漬ける。

- 1 - 漬け材料：鮎ずしの「飯」（鮎ずしを販売して残った飯は捨てているとのこと。）
- 2 - 砂糖：黒砂糖や三温糖がコクが出ると考えられる。
- 3 - 醤油：鮎ずしの飯や漬物の野菜から水分がでて色々な微生物が活動し易くなるので濃いたまり醤油が良い。
- 4 - 風味付け：唐辛子や山椒などが良い。
- 5 - 漬け期間：1～2週間

* 未来塾3期生「てんしょく」と共同開発をおこなう

図1 調味漬系統図



研究テーマー 3 近江の地酒を応援する



1. 地酒の現状

県下の蔵元は、残念ながら規模も小さく、また地理上、伏見や灘の大手酒造メーカーに近い県内消費約30パーセントと割合は低く、このため県民の県内蔵元に対する認知度は低いものとなっています。

ただ、日本酒全体の消費量が低下していく中で、地酒は安定した地位を固めており、中でも滋賀の地酒は固定ファンに支えられているといわれていますが、その中心は他府県の方という事実があります。



真野北文化祭でアンケート調査

他県と遜色のない質の高い滋賀の地酒をいかに滋賀の県民に理解していただき、いかに馴染んでいただくか、これは蔵元の関心事でもありますが、同時に蔵元訪問や試飲会などを通して研究を進めるわれわれの関心事にもなってまいりました。

2. なぜ応援を

まず、滋賀の地酒が一般に定着していないということがいえます。蔵元の名前は聞いたことがあるが、実際口にしたことがない。またおいしい地酒に出会う機会が少なくなってきたと言うことではないでしょうか。日本酒を飲む人、どうせ飲むなら、まず滋賀の地酒を是非賞味いただきたいということに他なりません。

滋賀の地酒は、地元のおいしい米、豊富な地元の水、そして酵母をもとに実に味わいのあるものに仕上がっています。地酒は地域の自然、文化の結晶といえる。地酒を味わうことで地方の風味、地方の文化に真摯に触れることができるのです。大げさに言えば、地酒を切り口に、近江の文化探訪を深めることができるわけです。それほどに、地酒は淡海文化を凝縮したものである。県下各地域には地域の文化を担う蔵元が懸命に奮闘さ

れているということに対し、われわれ地元のものが地元の地酒をかわいがるということは、ひいては近江文化の継承に関わることができるということに他なりません。



* 蔵元「秋の露」の中庭

3. では、どのように応援を

やはり、蔵元さんの動きとは別次元にて、われわれの立場で応援できることがあればそれが一番です。たとえば地酒の会に連れ立って参加する。利き酒会を開催する（できればお酒にあった和風料理があれば最高です）。パーティには、是非地元の地酒を用意すること。県外に出張の節には、是非滋賀の地酒を持参し、こだわりの酒として紹介しておく。

そして、広い意味で地酒を生んだ大きい文化に触れようとするならば、蔵元訪問がよいのですが、単独ではなかなかできません。そこで、たとえば滋賀の蔵元さんとの協力を得て、地酒スタンプラリーの開催をするということが考えられます。県民と蔵元との交流の場となりますし、何よりも地酒を育てた文化にじかに触れることができ、また蔵元さんの思いを受け止めることができます。

4. 地酒を通じ次代に淡海文化の継承を

滋賀県は、意識はあまりしなくても、暮らしやすい地域であり、水、米、地域に根ざした食文化が脈々と息づいています。このことから地酒はいわば淡海文化を凝縮したものであり、地酒を通じさまざまなものが見えてきます。水源は、安全な農業は、ゆとりある暮らしとは、伝統料理は、地域コミュニティはなどと際限なく広がっていきます。

地酒を味わい、文化をしみじみと語る。かつてのみんながそうであったように、楽しく淡海文化を淡々と継承していくこと。肩肘はらずにできることから始めていくこと、これこそが文化活動と文化継承だと確信いたします。

おうみ未来塾の2年間から

おうみ未来塾4期生、それぞれの2年間
長かったか、短かったか
深かったか、浅かったか
確かなのは、ひとつが終わったこと
そして、また何かが始まること
胸に去来するものは・・・



伊庭盟代 入塾時の思い

◇女性団体の活性化

平成7年に「あどがわ女性の会」を設立し、家庭と仕事の両立を図りながら、身近な仲間とともに、お互いを啓発しながら、「集い、つながり、学び合う」をモットーに女性の仲間づくりを始めました。しかし「自主参加を主体に求めたいことを、自分達が計画して魅力ある活動にしよう。」を基本理念としていましたが、10年たった今、会員数も減少傾向にあり、当初考えていたような活動が出来ずにおりました。しかし会員のための学習はもちろんの事、参加する機会の少ない人たちに情報の提供や、社会に貢献できるような基礎知識を学びたいと未来塾に入塾致しました。

◇卒塾にあたって

平成16年度に安曇川町が、生涯学習まちづくりの一環として募集していました、地域アニメーターの養成講座を受講していました関係で、昨年6月に開催された、生涯学習まちづくり実践交流会と、12月ふるさと再発見と両事業に実行委員として企画から運営までのお手伝いをしてきました。

そしてあどがわ女性ネットワーク“ゆう”が（安曇川町の女性7団体で構成）平成13年度から取り組んでまいりました、安曇川町における女性問題の意識調査の結果がまとめ、12月安曇川町との共催で男女参画社会を考えるフォーラムで報告することが出来ました。

以下意識調査の目的とアンケート結果の一部を添付いたします。

◇アンケートの目的

この度、ネットワーク“ゆう”では、社会情勢の著しい変化の中で、女性の生活実態と意識も大きく変化をしています。そこで家庭・地域・職場での生活の実態や、子どもの教育・結婚・就労・老後に対する会員の意識を把握し、「男女共同参画社会」づくりに向けての参考資料とするために、アンケート調査を実施することになりました。

これからの男女の生き方、社会のあり方について

1. 男女の平等意識

男女ともに、不平等だと考える人は約36.5%いる。その理由としては、「区の運営に女性が参加しにくく、役員にもなれない」、「会議などで女性が下座にすわる」、「女性を世帯の代表として認めない」があげられている。そしてその原因のとして昔からそれが当たり前とされて改善されない「社会的なしきたりや慣わし」や「男や女は性別により役割が違う」などがあげられている。また、その他の原因として「女性の理解不足」よりも「男性の理解不足」が50人以上も多く指摘しており、男性の意識改革が求められている。

2. これからの男女の生き方、社会のあり方

これからの男女の生き方、また社会のあり方として必要に思うことは、「男は仕事、女は家庭という固定的な役割分担意識にこだわらない」（75%）「子どものしつけに男女差をつけない」（75%）、「教育の分野で平等意識を育てていく」、（74%）「男性が男女平等の必要性を理解し、家事参加などに向けて努力する」（73%）の割合が高い。「女性が経済力を持つ」（32%）については割合は低いが、アンケート8で答えた「生活費を得るため」、「働くのが当然だから」とやや矛盾しているところがないだろうか。

以上のように昨年は私自身が関わっていました団体や、その他の事で未来塾で学習することが出来ませんでした。メンバーの皆様にはご迷惑をおかけし、申し訳ございませんでした。今後とも地域に根ざした生涯学習まちづくりのリーダーとして活動していけたらと考えています。

岸本広樹 未来塾に参加して



■個人として

「未来塾」の2年間を振り返ってみると、2つの大きなものを得たと思います。

まず一つ目は、「気づき、考えたら行動すること」です。仕事場で、遊んでいるとき、道を歩いているときなど、様々なシーンで何か問題に気づいたり、教えられたりすることがあります。そんな時今までなら「まーいいか」と思ってしまふことが多かったような気がします。しかし、そんな時に「なぜだろう？ どうしよう？」と真剣に考え、行動する人もなかにはいるのです。

未来塾ではそんな人たちとたくさん出会うことができました。様々な思いや苦労話を聞くうちに、「自分にも何かできるのでは」と思うようになりました。なかなか行動するところまでは難しいかもしれませんが、自分のペースで一步一步進んでいきたいと思っています。

もう一つは「人」の輪が広がったことです。

滋賀に来て1年しか経っていなかったときに未来塾に応募しました。動機の中には「滋賀の知り合いを作る」ことも入っていました。このことについては、充分満足できる成果が得られたと思っています。年齢や性別が全く関係ない様々な人々と出会うことができました。この出会いをいかに生かしていくか、と言うことが今後の課題だと思っています。



おうみ未来塾 2年間を終えて 原田 秀雄 /ひと録

NPOの事も、市民活動の事も何も知らず、勿論「淡海ネットワークセンター」の事も知らなかった私が、仕事を通じて或いは、地域活動を通じて私なりに「何か出来る事があるのではないだろうか。何か始めてみないと、このままじゃあかんぞ」そんな思いを持ったことから、ひょこっと扉を開いた“未来塾”。

〇1年目

日高塾長の講義から始まり、運営委員の先生や卒塾生の方々の講義・フィールドワークの受講、そして県内各地で取り組み事例の学習。

今思い出してみても、何も知らない私には何もかもが驚きの連続だった。特に卒塾生のエネルギーに熱い志を語られる姿は、大きな憧れを抱き見惚れてしまうことしかできなかった。

〇2年目

いよいよ実践の時となり、何度もグループのみんなと話し合いを持つ中で、「人と人との結びつきが大切」と始めた“ひと録”。

ところが、「人と人を結びつける事」ができなかった“ひと録”。

皆、それぞれに思い（志）を持っているものの、それを一つにまとめる事ができなかった。

自分の思いを相手に伝える事の難しさを痛感した。

苦笑いするしかないグループ研究であったが、できれば、私たちの実らなかった実例“ひと録”が、これからの未来塾の活動や取り組みを行っていく上での反面教師となれば、又ある意味役に立つのではないかと、あつかましく思ったりしている。

一年目にいただいた憧れを、仲間と共に何かの形で、地域のネットワークを創り出す実践を行いたかった。

しかし、私自身の勉強不足、統率力のなさで達成できなかったというこの経験を、これからの私の取り組み・活動の中で生かしていきたいと思っている。

多くの仲間を知り、新しい発見と驚きをもらった“未来塾”。

2年間の研修実践を終えたものの、まだまだ未熟な私ですが、私にできる「地域コーディネーター」を目指して努力していきたいと考えています。

お世話になった皆さん、本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願ひします。

4期生

志茂 文明



僕が未来塾に入塾した動機は、地元での市民活動での小さなシガラミや政治的思惑に取り囲まれた活動から離れたかったこと。又、学生時代から学んできた美術や歴史（考古）を生かした市民活動がしたかったことの2点です。

幸運にもステキなメンバーと出会うことが出来、活動スタートに至りました。未来塾を卒塾した今、ここでの学びがどのように発展していくかがとても楽しみです。1期生から4期生まで100人ほどの方が卒塾されとのこと。さらに5、6期（現在募集中）と続き淡海の地域プロデューサー養成講座、未来塾の今後にもさらに発展してゆくことが予測されます。

今日的には国家規模でのリストラ財政が実施されている現状を考えると、行政がおし進めている住民参画の動きと連動したものとしての市民活動の重要性を強く感じています。真に協働にふさわしい総合的プロデュースの能力こそ望まれることだと思います。私自身はそうしたことではまだ歩き始めたばかりですが、未来塾で出会った人々、学んだことの数々は決して小さなものではないと思っています。

自らの手で未来塾を変えていこう、このままじゃいけない。の強い思いが未来塾のエネルギーだと思っています。

私自身は、これからもアート文化活動を通じて、淡海の未来へ新たな地域文化の創造に向かってまい進していきたい、その思いです。

真の市民革命こそ、その目的であり、目標です。今後ともよろしく願いいたします。未来塾アリガトウ・・・

卒塾にあたって

糸井 豊美

不満だけで、動こうとしない住民を見て、自分がやってやる、この町を活性化させるのだ！ と、大きな望みを持ち、その一歩と、この未来塾に入塾しました。

講義に、フィールドワーク、合宿、どれもこれも子連れでは満足に出席できず、とても残念に思っています。

またグループ分け後も、地理的にいよいよ出席できなくなり、迷惑かけっぱなしの1年でした。（ひと録のみなさま、ごめんなさい）



こんな状況でありながら、大きな財産を得ることができました。それは、人です。
普通の人が、普通にすごいことをやっているのです。

環境、芸術、子どもの居場所、人権、歴史保存に編集と、人材の宝庫発見！！でした。
4期生のみなさん、そして私と話をしてくださった1～5期生のみなさん、ありがとうございました。これからの活動に活かしていきたいと思います。

数年後の「輝く甲賀」?? を お・た・の・し・み に

木村さんをはじめ、淡海ネットワークセンターの皆様、お世話になりました。ありがとうございます。



おうみ未来塾4期生 小林由季

仕事の関係で「デザイン」という言葉の意味を調べていたとき、「デザイン力を考えてみてはいかが -21世紀学力像の提案-」という日本大学文理学部小笠原喜康氏の文章に出会った。そこには、子どもたちが身につけるべき力として「デザイン力」をあげ、「デザインとは、私たちをとりまくモノと私たち自身とのかかわりを問いながら、トータルにその関係を構築する、プランニングするということ」、「目の前の課題に対して、一対一対応の正解を求めるのではなく、実践的で力強い解決方策を構築するために、課題解決のイメージを構築し、そのための遂行計画を立案し、実際の場面において調整していく、そういった能力、トータルなデザイン感覚・プロデュース感覚が求められている。」というようなことが書かれていた。

「デザイン力」とは、総合的学習の時間でめざすといわれる「生きる力」を別の言葉で表現したものだろう。今、問われているのは子どもよりもむしろ大人の生きる力、大人のデザイン力であると感じるが、その点から、おうみ未来塾は、自分自身の生きる力を自ら高めようとする場であり、そうした意識を持ちながら地域の課題を何とかしたいと思う人たちをつなぐ場であった。

自分にどれだけの力がついたのかは全く実感できないが、多くの人たちとの貴重なつながりと、今自分がいるところからどんなことにも関わっていけるのだという思いを携えてスタートラインに立ったと実感しており、大切にすべきものを見失わずに進んでいきたいと思う。

未来塾4期生

松田 達也



あっという間の2年が過ぎ、はれて卒塾を迎えることができ、ほっと一息つくような気持ちの今日この頃。何人かの卒塾生から勧められ、応募用紙を書いたのがついこの間のことのように。ホント気ぜわしかったものの充実した時間を過ごしました。2年間のなかで多くのことを学ぶことができましたが、その雑感を表し、論集に寄せたいと思います。

■地域の多様性、滋賀県の豊かさ

まず第一点。近江八幡からはじまり、長浜や高島などなど、1年目から多くの地域活動の事例をフィールドワークしましたが、一つ一つの取り組みについて新鮮な感動を覚えると同時に、滋賀県の多様性についてあらためて感じ入るものがありました。しばしば滋賀県は歴史的な背景からも、県をひとつの単位として実感できないということが指摘されますが、むしろそれぞれの地域の独自の取り組みは、一括りで言い表せない豊かさを滋賀県にもたらせているのだと思います。

「地域」という言葉を振り回すと、どうしても平板なイメージに陥るきらいがありますが、地域はその土地がもつ文化、歴史、風土、そしてそこに住む人々、交わる人々と切り離すことができません。こうした気づきは座学ではない実地の学びとして未来塾から得たものと思います。

■すべては“人”がつくる

フィールドワークで多様な地域活動を訪ねましたが、それぞれの取り組みを支える様々な人との出会いも、とても貴重な体験でした。どのような取り組みもそれを担っているのは生きた想いをもった一人一人の“人”であり、それを土台にしてこそ多様な組織や団体の「コラボレーション」や「パートナーシップ」というものの内実が生まれてくるのだと思います。

自分はこの地域で何を大事にしたいのか、何に取り組みたいのか……。課題の発見と、それを何とかしたいという想いを持つとき、人は誰でも当事者になります。地域の課題を自分の想いの上に位置付けた住民当事者こそ、地域活動の主体でしょう。

どんな地域作りの取り組みにも、その出発点には“人”がいます。未来塾で学んだ私たち自身もそうした想いをもつ主体なのだということに気が付かされました。さて4期生のなかからはどんな取り組みがうまれてくるのか、それはこれからの課題ですが、未来塾で出会ったつながりも大切な財産であることはまちがいありません。そうした多くの出会いをあたえてくれた未来塾に感謝します。

追伸：写真は2年目半ばの9月に誕生した三男混人です。ライフヒストリーの上では“塾生時代に生まれた子”ということになります。



水谷 光明

足かけ2年の「未来塾」を卒塾した。そして私はここで無形の多くの何かを手にした実感に溢れている。形も香りも…まだ何も見えていないのに！

強いて言うなら、それは一人一人の人生の想いと語りの時間を、塾生以外の人も含めて共有したことかも知れない。そしてそれこそが未来をつくる力と学びの根っこかもしれないと考えている。「生涯現役」を宣言する私にとって、経済社会にかかわる「仕事」と自ら生きた想いの証しをカタチにする「しごと」とは全くボーダレスである。

地域プロデューサーがそれにあたるか、あたらないかもわからない…。しかしこれからは世界も、日本も…いや「生命の青い星 地球」さえもその対象とならざるを得ない、視野と精神の柔らかさはそうした広がりを持ち、一方視点は”地に足をつけ” ゆっくりと地域を観察し、(再)発見し、課題解決の方向を興し、次世代につないでゆくことと考えている。

50代で入塾し60代で卒塾する私は、どこかに「戦争」の面影を体内に宿している。それゆえ困難な時代がくればくる程勇気が湧く！だから光があたろうともあたらなくとも地域が「和の輪になり未来を語り、笑い泣き」協同・協働する生き生きした地域社会をつくることは、これから生きる人々へ贈る「勇気」と「挑戦」というメッセージ。だから私が追求するテーマは「生きることそのもの=生活文化」である。

季が色を染め、自然が移りゆきて風が吹きぬける。私たちが出あい、学んで記念に植樹した樹々も年々成長していくことだろう！

もし私が勇気を失いそうになった時はあの森にでかけよう。風に吹かれてふらりと！そしてあちによったり、こちによったり一歩ずつ。みんな本当にありがとう！



未来塾で得たもの 成田 政隆

おうみ未来塾…地域プロデューサーとはなんだろう。

滋賀県のために何ができるのか。切り口はいろいろとあります。様々な視点から、滋賀への想いがぶつけていけることのできるそんな場であったと思います。しかし、皆様忙しすぎる方ばかり。時間が本当に足りないですね。

◆よったり...諸事情により、一年目終了のころよりなかなか参加できず、半ばグルーピングが終了してから、参加。よったりに入ると、個性の強い方ばかりで、少々戸惑いながらも、楽しく議論をさせていただきました。さまざま思いをもっておられ、もともとのグループありきの中で、つくられたものでないので、グループ自体の方向性でも活発に議論できました。その上で企画を作成していく上で、頭の中で考えるも、実際に運営するとなると本当に難しかったです。第二回目の山東町のイベントでは、急遽予定が入り、参加できずに申し訳ない限りです。

◆成田政隆...二年間に環境だけでなく、様々な分野の知識・そして現場を見させていただけることができました。多方面から物事を見ることの大切さを見出すことができましたし、またその中でも、社会的な問題の解決方法のアプローチは様々にあるものの似ているように感じました。物事の奥深くまで問題点を探求し、その上で、一つずつ解決していく。その際に、心を忘れてはならないと感じました。これからも地域にはいりこんで、問題点を見つけ出し、制度的に改善していく。市民の観点から、行政からのアプローチから...。人とお出合い、多くの方の持っておられる思い。しっかりと受け取り、そして広げていき、大津のため、滋賀のため、日本のため、世界のために、役立たせて行きたいと思えます。

◆最後に...これまでは環境分野を中心に、活動を行ってきただけに、これまで自分の知りえない分野を必死にやっておられる方々、そして、諸先輩、講師の皆様、スタッフの皆様にお出合いできたことに感謝申し上げます。

地 域 へ・・・ 石川 悠子

未来塾2年目と重なって、私は草津市の地域コミュニティ・コーディネーターという仕事をした。笠縫東学区の公民館に毎日出勤し、時々小学校や中学校にも出かけた。祭りを手伝ったり、子どもたち対象のイベントを企画したりした。

公民館に出入りするおっちゃんが、ある日、鯉の煮付けを職場の先輩に持ってきてくれた。すぐそばの川で投網を打って捕まえ、自分で煮たのだとおっしゃる。子どもたちにも見せてやりたいなと思った。館長さんは初めの頃は心配されていたが、おっちゃんは大乗り気。手伝ってくれる人も見つかり、びわ湖博物館から子ども用の投網が借りられることも分かって、投網体験教室が実現した。子どもたちと服のまま川に入り、投網を投げた。汚い川なのに泳ぎ出す子がいた。最後におっちゃんが大きなブラックバスを捕まえた。子どもたちが三枚に下ろし、から揚げにして食べた。おいしかった。

そうした毎日を過ごして、気づいた。私にも地域がある。コンクリート三面張りなのに蟹やホタルや魚のいる川があり、疎水があって里山が残っている。子どもたちがいる。



分からないのは、地域の人たちとどう出会うかだ。婦人会、PTA、町内会…新参者の入りにくいあの独特の雰囲気は苦手。離れていた方が気楽だ。

でも、未来塾を卒業した。笠縫東で「地域の子どもは地域で育てる」という信念にふれた。既得権だけでおんなじ人がやっているのではなく、地域のために誰かが苦勞をしているのだと知った。“分からない、苦手だ”ではすまされまい。

来年度、皇子山中学校の広報と藤尾学区の子ども会指導者連絡協議会の庶務をする。地域の時間はゆっくりだ。焦らず楽しんで、未来の子たちの土になっていきたいと思う。



大歳はるか

二年間、お世話になったすべての人に感謝いたします。
ありがとうございました。

長いようでたいへん短い二年間でした。

さて、この2年間、私は多くの人に出会い、多くのことを学びました。学校では学はなかったことばかりです。そこにおいてはすべての人が先生でした。「地域家族」の研究を通じて、地域とは生活する場としてだけでなく、学びつづける場として存在するのではないかと思いました。地域にある課題を発見し、それを何とかしたいと思い、「当事者」になり、解決していく。学びそのものだと思います。結果として、地域が人を育て、また逆に人が地域を育むのではないかと考えました。

みらい塾は卒業してしましますが、みらい塾が私に残した学び、想い、仲間、すべてを財産にして地域に戻りたいと思います。何事もまず一歩から。出会いを大切に、学びつづけていける自分でありたいと思います。

具体的にはこのままラテン学園に関わっていきたいと思います。みらい塾で調査しなければ、身近にあっても知ることのなかったことなので大切にしていきたいと考えています。これからもお世話になるとおもいますのでよろしくお願いいたします。

卒塾にあたっての感想

竹腰 裕紀



仕事からみで立ち上げたボランティア組織の NPO 化を図るための手立てを探るため、また自分自身が地域社会と関わりを持っていくために必要な何かを学んでみようという期待と不安の胸中で 4 期生に入塾したのが昨日のこのように思い出されます。可塑性を持ったカリキュラムという塾の運営方法にも興味がありました。2 年目の研究グループ「生活文化企画集団・よったり」が誕生してからの一年間は、仕事、自分自身の地域活動、趣味の会...と目まぐるしい日々が過ぎて行き、あっという間の一年間でした。現在、私は自分の住む山東町の「まちづくり大学“ルッチ大学”」の 2 期生に応募し、昨年 9 月から女子大生(?)をやっています。大学の目的は、まちづくりリーダーの育成。おうみ未来塾では、地域プロデューサーを育てるのが目的。どちらもよく似たものだと受講しておりましたが、ルッチ大学に入るとき、共通点はあるがその違いに気づくことになりました。未来塾は、地域の課題を発見し、解決のための方策を考え、そのための活動(運動)や事業を興すことができる、いわゆる問題発見力と政策形成力と実践力を兼ね備えた人を育てることが目的であることを、入塾のときの資料を改めて振り返り思いました。順序から言えば、「まちづくり大学」の受講をしてから「おうみ未来塾」を受講するほうがよかったのかな?でも、今思えば還って逆のほうが、違った角度や視点でまちづくり大学の受講内容や受講者の方々の考えを受け止められるのではないかと感じています。

また、未来塾だからこそ築くことのできた人とひととのネットワーク。特に研究グループで活動した『生活文化企画集団・よったり』のみなさんとは、本当にいろいろな意味で関わりを持たせていただきました。卒塾式の最終報告会の発表では審査員の先生方に厳しいご講評をいただき発表の仕方も審査の対象であったようですが、私自身は短い時間で言い尽くせないこともあり歯がゆい思いでしたが、発表がすべてではなく活動の過程で得るものがたくさんありました。

『一期一会』この出会いを大切に、今後も地域プロデューサーとまではいかなくともそれを意識して『地域でがんばる人』を目指したいと思います。4 期生のみなさん、また影で支えてくださったネットワークセンターのみなさん、特に担当の木村さん、本当に世話になりありがとうございました。ぜひ、卒塾生の集まる機会を多くつくっていただき、またみなさんとお会いできたらと思います。



わたしたちは地域で暮らす 「地球市民」です

提中 富和

私にはいつまでも忘れることのできない海外での思い出があります。それは団体旅行中の自由行動日のパリでの出来事です。みんながバスツアーに出かける中、私は一人で地下鉄と郊外電車を乗り継いでベルサイユ宮殿に行きました。そして日本語の案内用レシーバーを借りたときのことです。添乗員から肌身離さずと厳命されているパスポートと交換だということです。言葉もままならない中で一瞬ひどくためらい焦りました。その勢が「大事な」控えのレシートをポケットに突っ込もうとしました。その時です。誰かが背中を突っつくのです。振り向くと、白人の年輩の女性が「Don't lost」とやさしい声を掛けてくれました。感謝感激をしたことは言うまでもありません。お陰様で日本へ帰ることができたのですから（笑）。ベルサイユ宮殿からの帰り道、中国人の若者のグループから「この電車はエッフェル塔へ行くか」と尋ねられ、嬉しくなって「Yes」と答えたことを覚えています。そして何よりも、人と人之间には、国境も民族もないことを思い知らされました。みんな「地球市民」なのです。

しかし日本に帰ってみるとどうでしょう。「ガイジン」には近寄り難い雰囲気をつくっています。日本政府は、移民を排除しながら、3Kの労働力を外国籍の人たちに頼るといふ身勝手な政策をとっています。そのため、ニューカマーと呼ばれる外国籍の人たちは、人権侵害と言っても言い過ぎでない状況に置かれています。さらに私たちは、日常的には、生まれたときから同じ「地域住民」である在日韓国・朝鮮籍の人たちへの差別という根の深い問題に関わっています。私たちは、地域福祉をテーマに集まりましたが、行き着いたところは、このような外国籍住民のみなさんとの共生というテーマでした。「国際化社会」が言われ出して長い年月が経ちます。しかし地域社会の国際化は進んだでしょうか。これが私たちのこれからのテーマです。

私にとっての未来塾

洞ヶ瀬 義重



未来塾1年目の講義。近江八幡のフィールドワークが印象に残っている。近江八幡の町並みがやけに新鮮で、景観を残すこと

にどれだけの人が関わっているのか。滋賀県に住んでいながら滋賀県のことを全然知らなかった。

街づくりの面白さに気づき、熊川宿、五個荘町、長浜、大分豆田町などを訪問。共通項は水と古い町並み、人の生活。特に水という最大公約数の発見。未来塾で街づくりをしたいなと漠然と思っていた、1年生。

2年目。自分たちでグループを分類。私は「食」を中心に何かをしたかった。無農薬、有機栽培、グループ購入、実際の農業体験など幅広く話題は広がった。でもグループワークとしてまとまらなかった。グループで共通の何かを研究することの難しさ、会社と違い利害関係が無く、上下の関係も無い自由な論議に遠慮?が絡み合っていた。

5期生入塾式の日のお出来事。各グループ討議。岸田先生が「具体的に、突き詰めて、好きなものをやればいい。」と。「お酒」「好きやし」「面白いやん」。話が弾む。

いつもの晩酌が藤居本家の「旭日」。その縁かな?未来塾のグループ研究が「滋賀の地酒」。になるなんて。積極的に訪問しました。蔵元を。

歴史有る藤居本家「旭日」当主の話。含蓄有る言葉とこうしなければいけないという自信に満ちた発言。楽しかったし美味しいお酒でした。歴史の感じる蔵元。

木之本富田酒造「七本槍」。歴史有る蔵。北大路魯山人が逗留し、愛した酒。おいしい地酒を広めたいという気持ちが感じられました。

マキノ吉田酒造「竹生嶋」吉田専務の人柄にゾッコン。ボディのあるこれぞ地酒。酒への先入観、印象が大きく変化。

近江高島福井弥平商店「萩の露」人柄の良い当主と専務。格調の有る屋敷と庭。もう文化財です。お酒も美味しいです。ソフトなムードの?

藤本酒造、北島酒造、川島酒造など随分お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

滋賀の酒を研究し良かったこと。地酒の奥深さ。地酒は文化。とりわけ自分の知らなかった世界に対して積極的に関わっていったことが収穫の2年間でした。

未来塾ありがとう。メンバーのみんなありがとう。と、お礼を言います。

卒塾にあたって 尾本 良子



私がおうみ未来塾に入塾した動機は、地域の問題は地域で解決したい、地域で共感したいと考えたからです。未来塾で学び、活動する中でわかったことは、自分自身が地域の課題を客観的に深く捉えていないことに気づきました。ただ受け身で講義だけ聞いていたらきっと気づかなかった

ことです。地域にどんな課題があるのか、自分に何ができるのか、まだきちんと整理できていないことに苛立ちを覚えました。それがわからないと何も始まりません。今はまだまだ地域プロデューサーにはほど遠い私です。私は21世紀は地域で人と人が連帯・協同して、地域のさまざまな問題を解決していく時代で、そのような中で生協やNPOがその役割を発揮すると考えています。今後自分が何をしたいのか、何ができるのかを深く考え実現にむけて少しずつでも歩み続けたいと思います。最後になりましたが、おうみ未来塾のスタッフの木村さん、運営委員の先生方、第四期生の皆様ありがとうございました。また私の活動に協力してくれた家族に感謝します。



「未来塾で」

大林 恭子

まず、この2年間で私が出逢った、人、もの、考え、そのすべてに感謝します。私が、この未来塾で得たものは、数々の「であい」。そこから得たものは、沢山ありました。人が生きるということは、出逢いを続けることなのかもしれません。

住民と行政のあり方に疑問を抱きつつ入塾した私には、日頃、接する機会のない方々の実際の活動に基づくお話を聞くことは、机上の空論の雄弁者が云う、当事者が存在しない問題解決とは全く違い、本当に勉強になるものでした。

強く感じたのは「人ありき」ということです。地域とは、その地域に住む人があってこそ成り立ち、そこに住むものが自分の地域を愛し、育てることによって、活性化される。住民は、そこに住む限り、その地域の問題の当事者であるべきだと思います。それを放棄し、そこにありながら傍観者で居るのは簡単で、そうすれば、地域の問題を賞賛することも、非難することも自由にでき、且つ責任も負わないで住みます。

地域プロデューサーには、各人が当事者であることに気付かせ、そうした当事者意識を持たせる知恵が一番必要なことかもしれないと思いました。当事者は主人公であり、主人公が生き活きと、際立つまち。他人事は自分事としてみんなでがんばる地域づくりの助けができるよう、今後も出逢い続け、学び続けたいと思います。

今日まで、お世話になった方々、本当にありがとうございました。そして、今後とも、何卒よろしく願います。

「おうみ未来塾」で得たことと、 得なかったこと

福村 幸子



同じ具体的な課題を持つ者「同志」ならまだしも、長年携わってきた活動分野が各人異なるにもかかわらず、その20数名を大雑把にも4つに分けるといふこの塾の不可解なこだわり「グループ研究」は、「地域プロデューサー養成」という目的に照らし合わせたときにそれは果たして妥当なものなのだろうか？とか、目的からすると必ずしもグループ研究ではなく個別実践であってもいいはずとか、いろいろ疑問に思ってきたわけですが、いちばんの疑問は班分けによって各人が長年携わってきた市民活動や経験資源が切断されることについては配慮されていないということでした。それを考えると、卒塾したいまなお、「地域プロデューサー養成」を謳っておきながら、グループ研究にする必然性はどこにあるのか？という疑問は多々あります。その問いの答えは最後まで得られませんでした。

4期生あるいはグループ内のみなさんのこの塾に対する動機や、「市民活動」に対する動機は各人が全然違っていました。しかし、世の中には、未来塾の塾生とは比べものにならないほど、予想のつかない価値観の持ち主がいます。NPO・NGOとも共有課題が不明確な組織はあり得ないはずですが、今後、万が一そのような理解しがたい組織において、いっしょに何か1つのことをしなくてはならなくなったときには、この塾での、一言で表すには酷が過ぎる闇雲に近かった苦勞が、自分のポジションを判断する上では少なくとも役に立つこともあるのだろうと思います。これがこの塾で得たことの1つです。

塾でもう1つ学んだことがありました。何もやっていない人は手厳しい批評もお気軽に好き勝手に言えるが、しかし、ほんとうに有益で有効な批評とは、自分も相手と同密度の実践をしたときに出る批評だけであるということです（自戒を含めて）。有効な批評を貴重にも下さった同志に多謝。



未来塾での2年間 進 紀年

未来塾に2年間 居させて頂いて有難うございました。

入塾当初はインターフェロンの投薬を受けていて気分が悪い上に、耳が聞こえにくくなって、近江八幡での講義はほとんど聴き取れなくて残念な思いをした。

私の工程管理や技術屋としての経験が、何らかの方法で地域等の人たちに役立つものがあるのではと考えていたが、2年目のグループ活動ではグループから外れることしかできない自分の力を知り、寂しい思いをした。しかしこれまで技術屋として経験したことを生かすことを考えた方がよいと考え、秋あたりから自分では得意と思っている複合微生物に関係ある分野について自分の目で確かめた調査をもとにして実践をすることにした。それは、①土壤微生物肥料と作物について、②葡萄酒や漬け物の複合微生物の上手な使い方、③危機的な琵琶湖の水の改善方法の提案である。①については借りた狭い農地で実施中。②については鮎ずしのご飯や酒かすを主原料にした漬け床ができた。酒については山葡萄や古代米を原料に考えている。③については次のように考えている。

愛知川の春日橋の下流から琵琶湖に流れ込む間、数回にわたり伏流水様になっていて、かつ長期間にわたりこの状態を保っていること。上流と下流では微生物の量と質が異なり、下流の水は冬季にも関わらず、微生物の観察上で上流よりかなりきれいになっていると思われる。

この愛知川の伏流水様の状態と“ゆっくり濾過”が微量化学物質まで除去してくれることをベースに考え、野洲川等に応用したり、草津側の天井川の部分を“ゆっくり濾過”ができるように改造する案、更には灌漑揚水ポンプの活用なども提案したいと考えている。未来塾での多くの人たちとの出会いが、こんな風に考えられるようになったと感謝しています。



始めよう、続けよう

谷 優

頭の中のもやもやとしたものを何とか形にたくて入塾した。

入塾式では、何かやりたいと思ってる人がこんなに多くいること、そして、すでに何かやっている人の多いことに驚かされた。1年目の終わりにグループ分けがあった。その際、みんなが自分のやりたいことを発表した。やりたいことは、頭数だけあった。やりたい人が多くいて、やりたいこともいっぱいあるのなら何かできるのではないかと期待して2年目のグループ研究を迎えた。2年目は、

地域家族研究チームに所属した。たくさんフィールドワークをした。そして、成果発表会では、私たちのグループは、たいへん高い評価を受けたようである。しかし、何かが始まったわけではない。私たちのグループも何かを始めようとしたのだが、結果として始まらなかった。いや、むしろ始めようとはしなかったのだろうと思う。私たちのグループの成果はそれぞれが地域に持ち帰り日頃の実践に役立てると結論づけた。そして、今、卒塾である。頭の中のモヤモヤしたものは、かなり晴れはずである。今度は、それぞれが地域に持ち帰り日頃の実践に役立てるとの帰結からのスタートとなる。始めよう、続けよう自分に語りかけている。幸いにもグループの仲間もいる、そして、未来塾のみなさんもいる。みなさん、始めましょう、続けましょう。

卒塾して

小山 久子



折角の貴重な機会を与えられましたのに、個人的な事情が発生して半分も活動できなかったことをお詫びいたします。

でも本当に少しの期間でしたが広い見聞を経験できたことは、専門バカの私にとって大変貴重な経験でした。また事情が許せば未来塾に再入塾したいと思います。

今回はからずもサービスを欲する立場になってみて、いかに提供されている種類が少なさを思い知りました。隙間が多すぎる感を学びました。正常に生活が出来ている立場からは、思いもつかないサービスが求められているのに、それを発信する力もなく時間的余裕も無い人がたくさんいます。

これからは表層ではない活動をするにはどうすればいいのか、短かった未来塾の学びと自分の経験を生かす日がくることを願っています。

役立たずでしたが、お世話になり有難うございました。

私にとってのおうみ未来塾

馬淵 英幸



おうみ未来塾に参加させていただいて、正直あっという間の2年間でした。

新しい地域課題に取り組む魅力ある地域プロデューサーを養成することが目標との説明を聞き、自分にとりあまりにもかけ離れているなあと不安を感じつつ、内容の濃い講義やフィールドワークに参加させていただいたことが、昨日のこのようです。

さて、未来塾についてですが、その受け止め方は、皆さん同じではなかったのは、事実でしたし、これまでの活動内容、考え方や手法の違い、これらはあって当然だったと思います。けれども私自身は、未来塾に参加して、これまでぼんやりであった地域課題が再認識できたこと、連携のあり方を学ぶことができたこと、持続性の大切さなどが得られたことは、大きな収穫でありました。

研究活動においては、4つの研究グループのうち、「e-食」に所属させていただき、グループの皆さんのご支援ご協力により、滋賀の地酒文化をテーマに近江の自然・文化の一片を知るとともに、さらに地酒を支える人々とふれあうことができました。これらは、個人では到底味わえない貴重な体験でした。

なお、私の今後の卒塾後の方向ですが、湖北地域でようやく立ち上がった福祉NPO活動にかかわっていくことと、そして湖北地域の豊かな自然と歴史を大切にする人々との交流の中で、おうみ未来塾で得られた体験をもとに、できることから地域貢献の取り組みを行っていきたいと考えています。

最後になりましたが、とことん面倒をみてくださった、木村さんをはじめ、ネットワークセンター職員の皆さんほんとうにありがとうございました。また、4期同期生の皆さん、おつきあいいただきありがとうございました。

雑 木 林

— おうみ未来塾 4 期活動報告書 —

2004 年 3 月

編集：おうみ未来塾 4 期生

発行：(財)淡海文化振興財団

〒520-0801 大津市におの浜1-1-20

TEL 077-524-8440

FAX 077-524-8442

印刷：(株)スマイ印刷工業

禁無断掲載

おらみ未来塾4期生
2002.6~2004.3